

---

# **真・恋姫†無双「外史の外史、ここにあるぞーっ！(改悪？版)」**

日時々雲

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

「」のPDFファイルは、「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

真・恋姫十無双「外史の外史」（「」にあるぞーっ！）（改悪？版）

### 【Zコード】

Z2814Z

### 【作者名】

日時々雲

### 【あらすじ】

ちょっと、どこのではない環境で育ってきた、口の悪い主人公が頑張るお話。彼の存在は、外史にどのような影響を与えるのだろうか。

（とあるサイトにて、投稿してたのに手を加えたものです）

## はじめに

この作品は、とあるサイト（名前出しませんが、一応止めておきます）で投稿していたものに手を加えたものです。

改良もあれば、改悪の部分もあつたりします。

初見ではわからないですから、問題はないのですが。

極力コメディにしたいですが、シリアルを含んじゃいます。  
まだまだ経験が足らないので、拙いです。

そして、原作キャラのキャラ崩壊が結構激しいです。

さらに、オリキャラも多数（10ぐらい？）存在します。

さらにさらに、主人公は（自重はしますが）チートです。

最後に、アンチっぽいのを含みます。

そんな要素が苦手、もしくは嫌いな方は、backでお願いします。

かなり長くなっていますが、どうかお付き合って下さい。

## 第一話（前書き）

プロローグとこいつやつへ。です。

## 第一話

昔、むかしはるか後漢末期。

ある所にある少年がいた。

容姿は悪くなく、むしろ世間一般から見れば良い方だと言えるだろう。

そのくせ着ている服はみずぼらしく、貧しさだけで服が擦りきれてぼろぼろになつていては言い難い格好である。

そんな少年がいま、暗い暗い穴の中にいた。

「……ううん、冷たいし、かてえなあ。下が土だから当然といえば当然かあ？」

(土? あん?)

「なんでこんなとこいるんだっけか?」

さかのぼる」と数刻前……

「うう……、腹が、げ、限界だ！」

少年は森のなかをさまよって歩いていた。

言わずともわかるであらう。

食糧調達の為である。

最後の食糧が死きて数日が経つておつ、足元はふりつき、体力はもう限界だった。

「こんなことになるなら、最後の食糧をあの馬にやらなければよかつたぜ……。でも、ああも嬉しそうに食つてたし、しょうがねえか」

（やつぱり動物には優しくしないと、なあ。

動物愛護家たるもの、やつする義務があるぜ）

などと、独り言を呟きつつ、歩を進める。

「……つて、樂観的になつてる場合じやねえ！ 僕……俺の生死に  
関わる問題だ！」

（まあ、別に俺がここでのたれ死のうが悲しむ人なんていないから  
いいんだけどな）

ヒステリックになつては、皮肉げに笑みを浮かべ、口々口々と表情  
を変えながら、さりに奥へと進んだ。

すると、何故か地面から30~40cmほど宙に浮いている（正確  
にいえば、吊るされている）林檎があつた

「……やつた！ す、数口ぶりの食糧だッ！ この際、なんで浮い

てるかなんて気にしねえ！

いつもの少年ならば、当然麗だと警戒したであらう。  
しかし疑つてかかる暇も惜しむほど、腹を空かせていた彼は何かに  
とりつかれたかのように飛びついた。

この少年、馬鹿なのだろうか。

「いへ～よつしゃあ！ うむ、では早速、頂き……」

（あれ？

なんだこの浮遊感は。

……嬉しそぎて、天に呑まれるとかか？  
洒落にならねえぞ！）

絶賛落下中であるのにそんなことを考えていられる辺り、結構余裕  
があるのかもしれない。

「まだ、まだ死にたくないあーーいたつ！ ぐおおお……」

深くはないが、浅くもない穴底に尻から着地した少年は、急いで尻  
をさする。

「ケツがあああ！ ふう、結構痛いじゃないか……」

辺りに誰もいないのに 穴の中なのだから当然だ 平静を装つ  
少年。

本当に馬鹿なのかもしれない。

「つか、痛いだあ？ はつ！ また、死に損なったか

少年は、小さく懇々しげに呟いた。

「しかし、まぬけだなあ、おい。しかも、若干深めで出れねえし。  
……まあ、林檎食べて、寝ますかね」

見れば誰もが、猪を捕らえる為の罠である、と氣付く罠に引っ掛け  
た状況でなお、楽観的だった。  
もう、馬鹿で良いのでは。

「う、……思い出しただけで、なかなか恥ずかしい」

(うん、これから氣をつけよ。  
だがな作者、貶しすぎだらーが)

思い返した少年は、深く反省することにしたよつだ。  
とつあえず、メタ発言は止めましょ。う。

「しかし、いい加減出ないと不味いな。……近くに助けてくれる人  
はいねえかなあ？」

期待はしねえが、な。

都合良くなればすがなこ」とをしつながり、やつ姫をもうじた。

同じ」ひ、ある少女もまた森の中にいた。

「初めて仕掛けた罠だつたんだけど、つまくいつたかな？」

初めてにしては上手すぎだわって伯母上様に言われたけど……大丈夫だよね？

そう小さく囁きながら、森深くに進んでいった。

「たしか、ここいら辺に仕掛けたはず、なんだけどなあ……。森に入つて早、半刻（一時間）。

少女は、未だに見つけられないのでいた。

「うーん、間違えたかなあ……。ん？」

「……思い……けで、なか……しい」

（声？が聞こえる……捕まつて騒いでるのかな？）

そう疑問に思い、そつちに足を運んだ。  
すると……

「近くに助けてくれる人はいねえかなあ？」

……そんな声が聞こえてきた

（うん、ここには十八番しかないよね

あ、どこで十八番なんて言葉を知ったかは、ひ・み・つ（

メタ発言は止めて欲しい。

「 うるさいやー 」

はっきりと、自身の代名詞である言葉を、声高々に言い放った。

「 って、何処にだよー。」

ヒツシ ハリツモ、内心は安堵と驚きで一杯だった

たしか朝方、森に入つたとき晴天だつたはずなのに、ほとんど光が  
入つてこない。

すなわち、木が生い茂つていて、かつ、かなり長く歩いていたはず  
だから森深くにきている……。

確実に誰もいなくね？

と、判断していたので、当然と言えば当然である。

思考に耽つてゐる少年を尻目に、少女はひょつゝと顔を六へと出  
し、口を開く。

「 うるさけど 」

至極当然、単純明快なことであったのに、何故ツシ ハルでしまつた  
んだろう、と少年からは少し後悔した。

「 どうかしたのー？ 」

「いや、少し考え事をね。えと、この穴から出たいんだけど、若干深くて出れないから手伝ってくれないか？」

「うそ、いいよ ちょっと待つてね」

待つこと、ほんの一時

植物のツル?が、少年の元に落ちてきた。

「それに掘まつてね。案外丈夫で切れないから安心してね」

「ありがとう」

少年はツルを何度も引っ張り、強度を確認すれば、本当に人一人を吊るしても切れないだろう、と思つほど丈夫だった。  
若干の警戒をしつつ、それをつたつてよじ登ると、穴から出たところをさつきの少女がいた。

(さつきは光が少なかつたから見えなかつたけど、かなり可愛いな  
あ、おこ)

と、少年が内心思つぽどの頭に美のつべ少女だった。

「ホント助かつたよ、ありがとう。ええっと

「たんぽぽはねえ、馬鹿出つてやつのー。」

これが少年と馬鹿との出会いであった。

そして、後に、彼の少年は親友にこう語つた。

「この頃かな、俺の掘った深い穴に光が射し込み始めたのは

と

日も少しだけ傾き始めたころ、中庭に五人の人物がいた。うち一人はそれぞれ獲物を携えていた。

(いきなりだが、どうしてこうなった……)

相対する二人のうち、片方は頭を抱えたくなっていた。

(冗談じゃねえぞ！

だってよ、目の前で女が十文字槍を振ってるんだが、風を切る音が尋常じゃないんだぜ？）

勿論、槍の刃は潰してあるのだが、そこは最重要問題ではない。というより、当人にはそんな些細なことはどうでも良いことであつた。

一番に気にしているのは、何故闘わないといけないか、それも女と、ということだ。

(まあ、何度も考へても行き着く答えは一つだがな……)

そう考へながら、闘うはめになつた原因の女性を睨みつける。睨まれている張本人は、それを笑顔で受け流している。どうやら実際に楽しみにしているようだ。

10メートルほど間をあけ対峙し、戦わんと相対しているのは、穴に落ちていた少年　真名を陽という　と、そこから這い上が

る手伝いをし、ソロリまで案内してくれた馬由の従姉妹である馬超であった。

「うひし、準備できたぞ！ さあ、始めよ！」

準備運動したほうがいいのでは？

本当に鬪いたくない陽はそう問いかげ、無駄と言える時間稼ぎをしていた。

結果、実力を田の辺たりにしてしまった頬を咎ませたのは余談である。

「ホントに止めこしませんか？ 僕みたいな弱くて、剣を使ったこともない初心者と戦つても楽しくないでしょ？」

「こーや、駄目だ！ 母上が強いつて言つてたんだ。やるつたら、やるや！」

（あの女の言つことを信じているのかよ。

まあ、母親の言だから当然とも言えるが、本当にやめてもらいたいんだが）

陽はようりこつそう落胆して肩を落とし、深いため息をついた。  
すると

「じゃあ、いくぜー ハアアアアアー……！」

「うひし、待つ、いやああああーーー！」

馬超は真っ直ぐ陽の方へ駆け出した。

何の構えもしてなかつた陽は、逃げるより他なかつた。

「あつ、ハハ、逃げるなつ！」

「いいいやあだああ！」

真剣勝負になるはずが、鬼の変わらない鬼じつになりかわつてしまつていた。

一刻前……

二人は森を抜けるべく歩いていた。

一人は軽快だったが、もう一人はおぼつかない足取りだった。やはり、林檎一つなど気休めにすらならなかつたようだ。

「ねえ、ホントに肩を貸さなくとも大丈夫？」

「うん、大丈夫。その気持ちだけ貰つておくよ」

フラフラと歩く様子に、馬鹿はちよくちよく気にしてくれているようだつた。

だが、森の外まで案内してくれてさえいるのに、これ以上借りを作るのは不味い、と陽は判断し、感謝の言葉を述べるのみに止めていた。

「そついえばさあ、何であんなところにいたの？」

「いや、まあ、その……」

(非常に答えにくい質問を……)

そう、陽は心の中で呟く  
少し前に思い返していたことなので鮮明に覚えていたが、話すのを  
遠慮したいほどの失態だったため正確に答えるか否か迷っていた。  
しかし、助けられた身分であつたので簡潔に事の成りを話すことこ  
した。

「あははっ、バカだねえ～」

満面の笑みでいいのける馬岱。

そこには侮りも呆れの感情もなく、心底愉快そうだった。

馬岱の一言が陽の心中に突き刺さる一方で、その笑顔に釘付けになつ  
ていた。

「どうしたの？　たんぽぽの顔に何かついてる？」

「いや、ただ笑顔が可愛いな、と」

「…………や、やだなあ、もつー。」

(頬が赤くなってる。

熱でもあんのか？)

如何にも鈍感らしいことを思考する陽。

馬岱が顔を赤くしたのは、不意討ちの称賛の言葉に免疫がなかつた

為だ。

それは、彼女の血筋特有のものである。

「ええーと、と、とにかくお腹まだ減ってるんでしょう？」

「いや、問題ない…『ぐう～』… こともないですか」

慣れないことをばぐらかすように、あからさまに話題を変える馬ば。  
それを気に止めず、否定の意をこめたやせ我慢で返事をするつもり  
が、陽自らの腹の音に敗えなく失敗する。  
不様である。

「じゃあさ、家にこない？ 伯母上様も歓迎してくれるよー。伯母  
上様の作る料理本当に美味しいんだからー！」

(伯母……ねえ)

親はいないのだろうか、この子は伯母の何を知っているのだろうか、  
何をもつて歓迎してくれるといいきれるのか、実際に歓迎してくれ  
るだろうか。

と、黒い思いを一瞬頭に廻らすが、すぐに吐き扱われる。  
陽の頭の中を占めるはげ飯のことばかり。

「お言葉に甘えて行かせて頂きますー！」

何故か張り切る陽。

幾分かは足取りが軽くなつたようだ。

こんな腹ペコキヤラにするつもりはなかつたのだが。

意外と近かつたらしい馬岱の家のある町。  
何度もいろいろな人に声をかけられながら  
だが、奥へとぐんぐん進んでゆく。

「イリがたんぽぽの家だよ」

なんだ、ただの県城か。  
少しだけ現実逃避をしたくなつた。

(城住みで、かつ見知らぬ奴を勝手に入れられる自由を。……伯母  
はかなりの権力者か。  
……馬岱もあつち側の人間らしいな)

陽は燻ぶる想いを胸に、馬岱に連れられ、庭を迂回して厨房の裏口  
にまわる。

其処には一人の女性が立つていた。

「只今戻りました伯母上様！」

「お帰りなさい。畠の方は……失敗したようね

女性は馬岱の手に何もないことを見て、そう言った。  
猪が本当に取れていようがいまいがどちらでも良かったので、そん  
なに気にすることはないかったようだ。

「猪捕まえるのには失敗したけど、代わりに人間捕まえちゃったよ

実際は馬岱のみに、

「……捕まえたのつてやつちの子?」

「うん」

(あん? いつち見んなよ)

女性と陽は、視線を交わす。

睨むように見る陽に、女性は笑みを浮かべた。

「……蒲公英が初めて捕まえたのは食べないとね」

「ええっ!」「……は?」

女性のとんでも発言に、心底驚く馬ばと、何言ひてゐる?マイツ、みたいな視線を送る陽。

「冗談よ、冗談 大方お腹を空かせてるからって連れてきたので  
しょ?」

「……う、うん」

「だつたら?」馳走してあげないと「

そういうて女性は厨房に入つていつた。

女性を観察する為、口を開かないことにした陽だったが、きつい「冗談には嫌でも反応させられことに、少しだけ感心した。

(成る程、厄介だ)

やう、深く思いながり。

「……じゃ、じゃあ中に入らつか」

あの冗談は馬鹿にも効いたらしく、少しだけ気まずさがあった。  
陽は気にすることなく黙つてついていった。

「わあ、た～んとお食べ

陽の前の机に、結構な量の料理が並べられる。

(どんな時間配分したらいいんだか早く出来るんだよ)

自分自身で作ったとしても、これほどまで早くできないので、心からやうと思ひ。

……涎をだしながら。

だからこんな腹ペコキャラにかかるつもつね(?)

「本当にこんですか?」

「ええ、早く食べなことをめちゃうわ」

「……では、頂きます」

一度合掌する陽。

陽自身、自分がなぜ食べるために合掌するのかわからなくてこるのだ

が。

幾度となく思考してきたことを頭にしまい、料理を口に運んでいく。

(美味い)

そう思いながら、ものすごい速さで消費してゆく。  
その速さは瞬で食べている女の子に匹敵した。

「かなりあつたのに綺麗に平らげたわねえ~」

「(+)馳走様でした」

もう一度合掌する。

量に加え、質も良かつたので、陽は心底満足していた。  
そこに突然……

「坊主よ、剣をとつたことはあるか?」

……違う女性が声をかけてきた。

「ないんですけど」

「やうやく

「何か問題でも?」

「いや、問題はないんじゃが、少し思つてることがあっての」

う~む、といながら思考する女性。

陽自身も、何がなんだかわからなかつた。

脈略もなれば、剣に触れたこともないのに、先のよつて声を掛けられたのだから、当然だろ？

「わからないなら闘つて貰えればいいんじゃない？」

片付けを終え、戻ってきたわっさの女性が言つ。

「ふむ、それもやうじやのう」

「翠、この後暇だつたでしょ？」「

「ん？ やうじややうだな」

陽の隣で食していた女の子が反応する。

「だつたらこの子と闘つてみなさい」

「はあ？」「えつー」

女の子と若干空氣になつていた馬ばせが驚きの顔をあげる。

「この子多分強いわよ」

「よつしゃーなうやねー」

迷わず返事をする女の子。

そつして勝手に話は進み、そして冒頭へと戻る。

実はこの会話、陽は殆ど聞いていなかつた。

ずっと、剣についてを考えていたのである。

しかし、強引に連れて行かれ、成り行きを話され、対峙させられたのだった。

逃げる陽、追う馬超。

この後日が暮れるまで続いた。

この時の事を陽は語る。

「あのときの翠姉の眞ま似マジだった」と

辺りはすっかり暗くなつた。城内の廊下を歩く五人がいた。

「明日だ！ 明日は絶対やるからな！」

「丁重にお断り申し上げたいです」

「やるつたり、やるからな！」

「嫌です、ホント勘弁して下せこ」

「明日の朝またあの中庭だからな！ 必ず来いよ！」

「人の話を聞きましょ！……。絶対行きませんから」

先の一騎討ちで鬪えず、不満気な顔を露にしながらも再戦の約束をしげつけようとする馬超。

命からがら逃げ延び、疲れきった顔をしながら丁寧に全て断つていく陽。

諦め切れない馬超。

鬪いたくない陽。

そこに、不意に助け船が現れた。

「はこはこ、やうめでよー。とつあえず部屋に入りなやー」

「むわー」

無理矢理切り上げられたと思つた馬超は少々むくれるが……

「明日のことは『飯のあとでゆくべつとな』

……船が出されたのは馬超の方であつた。

嬉々としている一方で、もう一方は激しく頃垂れていた。

「……『』馳走様でした」「……

「お粗末様でした」

「やはり牡丹の作る飯は『』の『』

「ふふつ、料理だけは薊あさみに絶対負けない自信があるわ

「他でもわしに勝つてみせる癖に料理だけとはよく言つの『』。嫌味か？」

「そんなんじやないわ。他はうがうかしてるとすぐ追い抜かれてしまつほど不安定なものじやない。内心冷や冷やしてるんだから

熟女じう、オホン……お姉様方で話が弾んでいくようだ。

牡丹と呼ばれた女性は、娘の馬超と同じように、（むしろ娘が真似してるのであらうか）濃い赤色の長い髪を頭の頂点より少し後ろで一つにまとめている。

そして、薔と呼ばれた女性は、薄めの紫の長い髪を後ろで二つに分けている。

二人とも、歳よりも若い雰囲気を持つている。

（それにしても、皿かつたなあ）

そんな一人を氣にも留めず、陽は料理の評価をする。だから、腹ペ「キャラ」（ゝゞ

（……って何でまた馳走になつてんだよ！

逃げにくくなつちまつたじやねーか！

ちつ！ あのとき逃げる好機だったのによお……。

あの猪娘、足速すぎなんだよ）

元々の陽のプランでは、皿飯を食べたら皿を溢れとこすりと試みていた。

しかし、突然闘わされる羽田に 実際逃げていただけだが なり、その所為による空腹に身を任せ流されるがままにしていたらいつの間にか…… であった。

どうやら流されるのが得意なようである。  
馬鹿、ともいえるが。

「わつにえぱ」の子、名をなんといふのかしら、蒲公英？』

「あはは、……聞いてなかつた」

不意に、牡丹と呼ばれる女性が、蒲公英に問い合わせる。

しかし、今まで聞いたことない馬岱から、渴いた笑い声が響く。

「あはは～、じゃないだろ！全く！」

「それで、なんといつの？」

「姓名はありません、訳あって捨てました。ですが、命を助けて頂きましたのでどうか真名の陽、とお呼び下さい」

正直、名前を教えていなかつたことを、陽は知っていた。しかし、これで会うこともないだろ？、と考えていた為、敢えて教えようとは思わなかつたのだ。

やはり悔れない、と陽は思つた。

「やつ……わかつたわ。私たちも名乗つましょ！」

名前を聞けて満足だ、と言わんばかりに笑みを浮かべ、牡丹と呼ばれる口を開く。

「私は馬騰、字は寿成、真名は牡丹よ」

「儂は韓遂、字は文約、真名は薊じや」

「あたしは馬超、真名は翠つてんだ」

「蒲公英の真名は蒲公英だよ」

各自で自己紹介する四人。

陽には名前はどうだつていいいのだが、いきなり真名は不味くないか、  
とは思った。

「此方は真名ぐらいしかお礼に渡せるものがないのでお預けしたの  
ですが……よろしいのですか？」

「よろしくのよ」

（軽いなおいー）

馬騰による即答にツッコミたくなつたが、陽は自制した。

「……わかりました。大切にお預かりさせて頂きます」

（ま、別に構いやしねえさ。  
どうせ会うのは今日かぎりなんだからな）

夜中にも出て行こうと思つていた陽には、四人の真名など、本当に些細なものだった。

「やう思つていたときもありました」

ある部屋で、独り言を呴いて頭を抱える者がいた。  
先ずは、前言撤回からしなければなるまい。

夜逃げは夜するもので、朝にするものではないからである。

今までになかつた結構な待遇を受けた陽は、戸惑つていた。  
何時も通り逃げるか、否か。

(夜逃げ、ダメ、絶対!)

ところづ温情に対する背徳心や罪悪感。

(夜逃げ?

はつ、違う違う。

俺は帰るだけさ、家と言つ名の広大な大地に!…)

といつ無茶苦茶な合理化による夜逃げの正統性。

この2つによる余りにくだらない葛藤の末、結局夜逃げを選択した  
陽。

早速、扉の取っ手に手をかけ、押すが開かない。

何度も試みるが失敗する。

蹴破つてやろうか、などと一瞬思つが、流石に夜逃げをするに音は  
立てられまい、と諦め。

さらに、此処までの旅路の疲労、頭をフル回転させた副作用による  
突然の睡魔。

少しだけ、と寝台に就き睡眠。  
起きたらまさかの朝。

といつ、なんとも馬鹿馬鹿しい展開である。

「お~い、起きてるか~ 飯だぞ~!」

突然扉を押し入つてくる馬超に、思考が遮られる。

( ちょっと待て、今馬超は押して入ってきたよな )

陽は、凄く死にたくなつた。

そんなこんなで数刻後……

今日もまた、陽は中庭に剣をもたされ、立たされていた。

「お腹が減りました」

「嘘つけ！ それを食つたうー！」

「さあと廻に……」さりげいつてただろうが――むう

準備運動はもう終えた! 「ぬう

「ああ、井戸！ それそこぢなやー。」

しひれを切らして いる馬超

「は、初めてなんです！」優しくしてください

「どこの生娘の言葉か！」

まさかの韓遂から突っ込みが入ったことに、陽は少し驚く。  
そしてそのまま、なかなかやる人だ、などと意味のわからない評価  
をした。

陽がまだまだふざけていると、馬超が怒りで震えだした。

(わらわらやめようか)

少し、腹を括つた。

「はあ～～。じゃ始めましょうか

そう溜め息をつきながら、適当に構える陽。  
剣を握つたことすらなかつたはずが、自然と寸分の隙もない中段の  
構えをしていた。

「へえ～」「ほう

牡丹と薊は揃つて感嘆の声をあげる。  
やはり見立て通りだ、と一人は思つた。

「あれが初めて剣を持つたやつに見えるか？」

「見えないわね～。どう見たって熟練の剣士の構えじやない」

「そんなに凄いの？」

馬岱が一人の会話に割り込む。

少しばかり槍術をかじっている為、剣とはいえ興味を惹いたらしい。

「やうじゅのひ……翠はもしかすると負けるかもしねん」

「えつーー、お姉様がーー?」

韓遂の言葉に、馬岱は驚く。

同じ槍術を習う、自分より遙かに強い馬超が負ける、と聞かされたのだから当然であろう。

「ええ、そうよ。蒲公英もこの闘いをしっかり見ておきなさい」

「はーー! 伯母上様!」

その元気の良い返事のすぐ後に、均衡は破られる。

「ハアアアアアーー!」

雄叫びと共に槍を携え真っ直ぐ突っ込んでくる馬超。  
馬超の流れるような降り下ろし、薙ぎ、切り上げなどの怒涛の攻撃  
が、容赦なく襲ってくるのが陽の目に映る。

本来ならば、見えるはずのない左目にも、である。

陽は普段、右目でしか世界は見えない。  
何故なら、左目は包帯で封じているからだ。

そこに、無いわけではない。

見えすぎるから、封じているのである。

にもかかわらず。

ちょうど馬超の一撃一撃と重なる太刀筋が、陽の左目には見えてい  
た。正確には、瞼の裏に浮かびあがつてくるような感覚だった。

それに伴つて、ズキズキと左目に痛みが走る。

それに耐えながら、陽は馬超のあらゆる攻撃を全て、避け、反らし、受け流す。

身体が覚えていふと言つべきか、頭の記憶が身体を動かして言つべきか。

とにかく、全ての攻撃に対しても身体が勝手に動いていた。

それは陽自身もよくわからない不思議な感覚だった。

「あたしを舐めてるのか！」

「…………」

一度攻撃の手を休め、下がりながら馬超は言い放つ。  
なかなか攻撃しようとしない陽に怒っていた。  
しかし、陽は答えない。

「チツ！」

舌打ちをしながら、馬超は一気に距離を詰め、急所である喉元を狙い突く。

その瞬間、今までにない激痛が陽の左目に走った。

中庭に一人立つてゐる。

一方は刃を相手の喉元に突き付けており、もう一方は腕が弾かれ無い防備な状態であった。

しばしの静寂のあと、一人が地面に崩れ落ちていつた。

剣を落とし、左田を押さえながら。

「知らな……知つている天井だ」

何せ昨日の夜、今日の朝に見たのだから、当然である。

「あつ、起きた？ 伯母上様たち呼んでくるねー。」

「あつ、ちよつー。」

馬岱の閉めた扉の音が無情に部屋に鳴り響く。

(ちよつとぐらりと待つてくれても良くね？)

半ば無理矢理相手をさせられたのだから、もうちよつと労つて欲しかったようだ。

鬪いといえは、さつきの痛みは何なのだろうか、と陽は包帯の上から左田を撫でる。

(しかし、だ。

ちよつぴり頬が赤かったのは氣のせいだろ？)

一通り考えたが、分からぬことは分からぬ、ところとで陽は思考を投げ捨てた。

そして、先程の馬岱に対する思考を始める。

暇つぶしもあるので、考えることは好きなのだ。

その後、すぐにいつもの四人でやつてくれる。  
そんなに暇なのか、と思わせる出現率だ。

「陽、アナタの武、凄かったわ。その後すぐに倒れたけど大丈夫か  
しら?」

「……まあ、異常はあつませんね」

「本当に初心者に負けたのか……」

「……あつません。嘘を言つても仕方ありませんし」

34

「それで、提案なんだけど。……うしごとしない?」

質問に簡単に答えていく。

若干項垂れている馬超を、陽は気にしなことにして。

「ううで働いてみないかってこやつは聞こてるのじゃ  
「はあ……」

(「マイツ、馬鹿だろ）

若干驚き、そして呆れる陽。

予想外の勧誘に、ついつい余計なことを考えてしまつ。

「なんだつたら、家族にならない？」

満面の笑みを浮かべる馬騰。

「　　「　　「　はあー！？」　　「　　」

そんな話を聞いていない四人は、満場一致の驚愕だった。

この時のことを、陽は親友に語る。

「あれは俺の人生の中で一番目に驚いたことだつた。一番は、お前に会つたことだがな」と

## 第三話（後書き）

血口紹介が三話目で、とか  
W

「……朝、か

隙間から僅かばかり入つてくる光に、陽は目を覚ます。その光が疎ましいと思わなかつた日はない。

陽は物心つく前から朝が苦手、否嫌いだつた。

また明くる日が来たという合図であり、自らの持つ真名と同じ字を持つ、太陽が何よりも嫌いだからであつた。

まだ醜態を晒して生きているのか、と問われている気がして。自らの真名と比較され、見下されているような気がして。

「戯言だな」

毎朝やつてくる嫌悪感を振り払い扉に手をかけて引く。さすがに1週間前と同じ過ちは犯さないぞ、と心で呴きながら部屋から出る。

日課となつた剣の鍛練をするために中庭にやつてきた陽。朝の運動にはもつてこいであった。  
いつも通り 剣の重さと長さに違和感を覚えながらも ゆっくりと振るつてゆく。

自らの記憶を掘り起こすかのように。剣を振るつた記憶などないはずなのに。

(にしても、馬超強えよなあ。

どこからあんな力が女の身体から湧くんですか、つと)

思わず思考してしまつ。

馬超との闘いはほぼ全て反射のように身体が動いており、初闘時に勝利を納められたのもカウンターが反射的に繰り出されただけだった。

初闘時……

首への突きが左目に見えた突きと重なった瞬間、それをどう対処してきたのかが、陽の封じている左目に映る。

その対処の仕方を脳で勝手に処理されたのか、身体が勝手に動く。槍の切つ先を剣の腹の側面で軌道を反らし、左足を退いて半身になり、槍に沿わせたままの剣で槍を弾き、素早く右手のみで剣を相手の首元に突き付ける、という具合だ。

実際には槍ではなく細剣?の情景が映つたのだが、応用が可能だつた。

勝敗がつき緊張がぬけると、流れてきた情報の量に脳が耐えきれず、左目の痛みを伴い気を失つてしまつたのであつた。

(結局、あれは何だつたんだ?)

そんなことを考えながら半刻ほど剣を振るつていると、後ろから声がかけられる。

「お兄様、『ご飯だよ!』

馬岱が呼んでいた。

これもこの1週間で習慣になつたことだつた。  
馬騰の家族にならないか発言の翌日には、

「お兄様つて呼んでいい?」

と聞かれた陽。

早いだら、と思いながらも悪い気はしなかつたのでそのまませいでいた。

(まあ、とりあえず飯だな)

そう思い、馬岱の方に向かつた。

朝食後、陽は城の一一番高いところに來ていた。  
馬鹿は高いところが好き、と言つがそついつた所以ではない。  
生憎、陽は馬鹿ではない。

多分、そう、めいびー。

といつより、抜けていふと言つた方が適切である。」

「今日で1週間だな」

馬騰の問題発言についてを思ひ。

完全に思考がストップし困惑していると。

「とりあえず今は保留ってことでいいわね？　2週間……いや、1週間ね。1週間あげるから考えて置いてね」

と、勝手に決められていくが、有無を言わせない笑顔にコックリと頷いてしまつたのだつた。

（あれはなかなか怖かつたなあ）

縁に足を外に投げ出して座り、そう小さく呟く。

そして、頭に両肩、腿など計五羽の鳥を留まらせながら思考に耽る。はたから見れば、なんともコミカルな絵図である。

ここ1週間を振り替えると、ろくなことがない　此処に来るまで

とは天と地の差がある　毎日だつた、と陽は思ひ。

馬騰の作る飯を食つて、馬超の鍛練に無理矢理駆り出され、韓遂には読み書き、ひいては兵法の勉強をさせられ、馬岱に街に連れ出され。

（……使役じゃないの馬騰だけなんだが）

でも、不思議と嫌ではない、と考える自分に困ったのも記憶に新しい。

正直に言えば、比較的に自由なのでいつでも逃げることができるが、逃げなかつた。

否、本当は逃げられなかつた。

1、2日目は、ただ飯食らいが出来る、といつ損得勘定から。

3、4日目は、ここまで世話になつたのに、といつ罪悪感と此処の居心地の良さから。

5、6日目は、どうしてここまで待遇が良いのか、といつ懷疑心から。

何故、俺を家族にしたいのか。

分別出来ない。  
ふんべつ

何故、俺を家族にする必要があるのか。

理解出来ない。

本当に俺が家族になつても良いのか。

判断出来ない。

わからない、分からない、解らない、判らない、ワカラナイ。

いくら考えても答えが弾き出されない。

(陽、たしか15歳！)

六日過ぎたころかな、イライラする…）

ボケたところで、このイライラはなくならなかつた。

突然に、理由もわからず優しくされたことと一緒に待つと言われてはいたが、普通ではあり得ない待遇に、陽の中で戸惑いと疑問が生まれる。

疑問はいつしか疑念に変わつていく。  
心に巢食づ聞がそうさせた。

しかし、先の四人と過ごすときは払拭される。  
だが、また独りになると、そういう黒い感情が湧き出でくる。  
そんな口口口口と変わる自分に、苛立ちを覚えていた。

気付けば、いつの間にか鳥たちはいなくなつていた。  
飛び立ていつたことに気付かぬほど深く思考していたのか。  
はたまた、暗い思考していることを感じとり、恐れ逃げてしまつたのか。

「どうでもいいか」

八つ当たりの対象にしなくて済むなら。

それ程、動物たちは傷つけたくなかつたのだ。

それ以降の思考を打ち切り、陽は寝入ることにした。  
呼ばれているような気がしたが無視することにした

「お兄様あ～」

かなりの声量をあげ、自らの義兄になるやもしけぬ人を探す。太陽も天高く昇り、いわゆるお昼時であった。

「いつもは、たんぽぽやお姉様、伯母上様、薙様の誰かと一緒にいるはずなんだけどなあ」

そう呟きながら城内を歩く。

辺りを見回してはまた次へ、と結構必死な彼女の名を、馬岱といつ。どうして探しているか、と問われたら、陽を昼食に誘う為である。が、なかなか見つからない。

……この時点で既に城の上にいる陽に、気付けるはずもなかつた。

「仕方ないのかなあ？」

(今日、だもんね)

小さく溜め息を吐く馬岱。義兄になつてくれるのか、もしくは友達、悪ければ赤の他人になつてしまふのか。

それを決めるのが、今日だ。

馬岱としては、本当はいて欲しいと思っている。

強さに対する尊敬と、何故だかわからない絶対の安心感。

それが、離れたくない理由だ。

しかし、それは兄と呼ぶ陽が決めること。

自身が口出ししていくことじやないと分かつてゐる。

それが、すこしだけ歯痒い。

「……」  
「ううにいたい……って思つてくれるよ」手は頬へしてきましたもつ  
だけじなあ……」「……」

正直、馬岱ら四人の行動に対し、陽はつとおしいと思つていた。  
しかし、呆れか諦めか、はたまた違う感情か。  
こんなのも悪くないと想い直している。  
馬岱の強引な行動は、かなり良い方に傾いていた。

「蒲公英」

自分を呼ぶ声が聞こえ、後ろを振り向く馬岱。  
声の主は伯母の馬騰だった。

「今日せやつとしとてあげなさい」

「でも……」

「蒲公英は、やれるべき」とほやつたんでしょう？

「それは勿論だけど……」

馬騰の言葉に頭を伏せる馬岱。

そこにどれほどどの気持ちがあるのかを推し量れた馬騰は、安心させる  
ように笑む。

「だつたら待つだけしかないわ。それに多分大丈夫よ」

「ホントに？」

「ええ、私に任せなさいーー。だから、昼飯食べなさい、冷めてしま  
うわ」

「うそー」

どこからかの自信が来るのかは分からないが、伯母の言ひ從つ鴻代  
だつた。

馬超は中庭にやってきていた。  
無論、鍛練の為である。

自らの愛槍 銀閃 を振るつてゆく。

目前には、最近鍛練に付き合わせた男の姿はない。

また誘おうと思つたが、母様と薬さんに止められたのでやめていた。

「母上や薬さんとは違つた強さんだよなあ」

思わず呟く馬超。

ここ一週間何度も闘い、勝つてはいるが、体力的などいでしかな  
く、まだ一本も取れていなかつた。

負ける気はしないのだが勝てない、といつ不思議な感覚を覚える馬  
超だつた。

「まだまだあたしは強くならないと。アイツから完璧な勝利を得る  
為になー！」

それを為すにも居て貰いたいんだけど、と結構私欲の傾向は強いものの、残って貰いたいという気持ちはあったようだった。

政務をそこそこ、窓縁に右膝を立てて横向きに座り、外を眺めながらちびちびと酒を飲む妙齡の女性がいた。

韓遂である。

昨日まで、毎日一刻ほど座らせ、勉強させていた机を見やる。そこに、だらけながらも指示したところまできちんとやる男はいない。

い。

「一体、何を考えているのかのお？」

それは馬騰に問うたのか、はたまた陽になのか。  
あるいはどちらにもか。

どちらにせよ、此処にいない存在から答えが返つてくるはずなどなかつた。

「才を無駄にしないためにも、此方について欲しいが、……何とも言えん危うさも持ち合わせておるからな。……困ったもんじや」

思わず溜め息め息が漏れる。

字が読め、かつ勉強させた時、驚くほど速く吸収していく陽の才を潰すには惜しいと思つていた。

しかし、人生経験豊富である韓遂は、陽の心の闇に気付いていた。  
その為、どっち付かずの状態であった。

「それ」「よく似ておる……。それが所為か、義姉上よ

思いこを馳せるは今は遠き人。

空を見上げれば、厚い雲に覆われていた。

「風の予感じやな」

もつ一度溜め息を吐いた

「あーあ、昼食い損ねた」

此処にも溜め息を吐く者がいた。  
三刻ほど寝ていたであろう陽である。

「さてさて、時間かな」

そつ眞いて城を降りていった。

待ち受けけるは波乱と知らずに。

この時のことを陽は語る。

「これはあんまり思い出したくない記憶だなあ

と

Side 韓遂

「ここまで続くのじゃ、この下らぬ争いは……」

かれこれ半刻ほど経つおるのに……よく続くのう。

「労働力だといって、強引に連れてかれ、働かされー。」

「強引に手をひかれ、連れてかれるなんて何時ものことだったわ……」

（嫌じやなかつたわね）

「そのとおり、俺は何度鞭でつちつけられたかー。」

「私だつてあるわ、そんなことべらい……（主に闇でね）」

「抵抗したら縄で縛られ、向田も放り出されー。」

「抵抗したら、縄で縛られ……ああ……」

この一週間でほとんど出すことのなかつた感情を、これでもかと言つぐりい前に出しておる。

聞いてみると、いやつの件絶な過去がわかる。

それを似ていると云われ、相当腹が立つてゐるようじやな。

それはまだわからぬもないのだが。

問題なのは牡丹じやー！

さつきから聞いておれば、何の話をしておるのだ。  
牡丹の漏らす話の内容が怪しそうであるではないか。  
明らかに邪なことを考えておるじやうひ。

しかしながら、こくら似ていると云えども、それを重ねて考えてしまつほど、あやつは愚かではないはずじゃ。  
なんといっても、儂の義姉やつてゐるのじやからの。

義姉上よ……本当に一体何を考えておられるのじや？

ある一室で舌戦……舌戦？が半刻ほど繰り広げられていた。  
対峙しているのは、言わずもがな陽と馬騰である。  
陽は顔を赤らめ激昂中。

馬騰は恍惚とした表情で、両手を違つ意味で赤くなつた頬に手を添え、いやいやといった様子で首を振り、ほほ自分の世界にトリップ中。

馬岱はそんな二人の間で、仲裁に入るかどうか決めあぐね 正確には隙が見当たらぬいため おろおろしてい。

馬超は自分の母の言つていることが違うことを意味しているように感じるが、知識として無いものがわかるはずもなく、ぽけーとしている。

韓遂は据えた田で馬騰を見ている。  
とこうカオス的状況であった。

人々、事の発端は馬騰の一言にあつた。

曰く、「自分と似ている」と。

陽は眉間の苛立ちも相まって、冷静にはいられず、熱くなっていたのであった。

「てか、アンタ、話聞いてんのか！ つー！」

思わず発してしまった言葉で陽は氣付く。

先ほどからほほ自分の過去の獨白になつていたことに。この台詞を言わせる為に、わざと反感を買つよつて立ち回つ、ここまで誘導されてしまつたことに。

嵌められたことに、沸々と込み上がる怒りを残つていた理性を総動員させて無理矢理押さえつけ、馬騰を睨み付けていた。

「せつかく綺麗な顔してんだから、そんな形相しないの」

「…………」

しかめつ面で、無言を決め込む陽。

「ふむ、やつぱつ似ているわ……同じといつていこうべらー

「 つー！」

眉間の皺はさらに深くなり、眉も一気に上上がる

「 ……わけ ……なよ ……」

「え？」

「アンタと同じだと……ふざけるな！ アンタみたいな幸せ者と俺が、何が似ているだ！ 何が同じだ！一緒にすんじゃねえよ！」

一度も似ている、更には同じと言われ本気で腹を立てていた。

「そんなこと言つても、……本当はわかっているでしょう。アナタと私は同じ存在……だから、アナタがそれに気が付いてこる」とぐらにお見通しなのよ」

もともと、陽がこの一週間逃げなかつたのは、誘いを受けたときに家族となるそれぞれの人物たちを觀察し、見定める為でもあつた。そして、馬騰の言つ通り陽は気付いていた、いや、感じていた。「馬騰のこと」「自分と似たような奴」と。しかし、それを頑なに認めることを拒んだ。

認めてしまつと、自分と似た奴が自分の近くにいる、といつ事態に嫌悪感を感じ、そしてその事実に劣等感も感じるからであった。

「……認めねえ。絶対認めねえ！」

そう言いながら、左田を隠す為に巻いてある包帯を取り除いていく。決定的な違いを見せつける為に。

「これがアンタとは違う理由だ！」

隠していた包帯をすべて取り去つて左田を開く。  
そこについたのは……

「「…………」「「……？」」

……瞳の黒い目だった。

瞳の色 자체は別段変わった物ではなかった。

ただ、右目とは圧倒的に違っていた。

光を入れて、反射させて輝く銀色の右目。

光さえ吸い込み、輝きをみせない漆黒の左目。

片方ずつなら、何ら問題ない目。

右目と左目が相まって、初めてわかる異常。

今で言つところ、オッドアイだった。

「綺麗、だね」

馬岱が頬を朱に染めて声を洩らす。

馬騰と陽の間に居たので、一番近く、見やすい位置にいた。

「…………は？」

途端、ズキッ、と。

陽の左目に、この前以上の激痛が走った。

「綺麗な目だね」

「…………え？」

「だから、綺麗だつて」

「綺麗？…………ちょっと待つてよ。どうして？…………こんなのが、おかしい！この色違いの目が恐ろしくないの？怖くないの？お

ぞましくないの？ 気持ち悪くないの？」

「そんなこと全く思わないね！ むしろ格好いいな、って思つてる」

「あはははっ。綺麗に続いて、格好いいだなんて……可笑しな人だね、君は。でも、ありがとう」

「へ？ 何が？」

「初めてなんだ……」の目をそんな風に言ってくれる人

「なんで？ こんなに綺麗なのに？」

「君は本当に可笑しくて、不思議で、変な人だね」

「変じやないよ」

(なんだ、今のは。  
いつもより……鮮明すぎる。  
だとうのに相手の顔だけ見えない。  
誰なんだろうか?)

記憶から溢れるように見えた映像のようなものに、陽は疑問を持つ。稀にこの手の夢を見るのだが、鮮明に声などを聞いた覚えはなかつた。

「ちよつと、お兄様……大丈夫?」

左田を押さえて、痛みから耐えるよう歯をくじしばつて『陽』に心配の色を見せる馬岱。

「大丈夫……だけど、なんでだ? この色違ひの目が恐ろしくねえの? 怖くねえの? おぞましくねえの? 気持ち悪くねえのかよ! ?」

とりあえず、わざと小さな自分が小さな少年? に言つていたことを問うた。

それに対し、馬岱は満面の笑みを浮かべ、答えた。

「ううん、全然! むしろお兄様によく似合つて格好いいよ!」

「やうね」

「うむ、そうじゃの」

「やうだな」

いつの間にか陽の目の前に周りこんでいた三人も、馬岱の言に同意する。

「はつ……ははは。可笑しな人たちだ、アンタらもアイツも……格好いいだなんて。おかしい……本当に可笑しいよ」

ははは、と愉快そうに笑い続ける陽。

両田からとめどなく流れるものを氣にもとめず。

「むう～！　たんぽぽたちはおかしくなによ～」

当然のことと言つただけなのにおかしい、と言われたこととむくれる馬鹿だ。

「はつ、はは。はつ、はぶつ、ふぐうつー！」

「笑うなら笑う、泣くなら泣く。ビッちかにしなさこ」

泣き笑いをし続ける陽は、馬騰にかなり強引に抱き寄せられ、優しい手つきで頭を撫でられる。

ほぼ初めてである母のぬくもりに身を委ね、四対の優しい眼差しに見守られながら馬騰の胸の中でひとしきり泣いた。

この田のお蔭で虜げられ続けてきた苦しみが、全て涙で溢れ出した。

心中で、この人が母なら、ここにいる人たちが家族なら、悪くないと思つた。

「JIIJIIで終われば良い話だが、それは問屋が卸さない。

「寝ちゃったわね……さて、どうしようかしら」

「牡丹よ、お主は止めて置けよ……何をするかわからんからの、ナ一をするか」

「し……ないわよ、息子になつたばっかなのに」

「うん? なんじゃ、今の間は?」

「うう……かとこつて薊には渡さないわよー。」

「べ、別に欲しいとは言つておらんわー。」

「ふ~ん」

「ぐつー。」

実は別に寝ていなかつたりする陽。

息を整えていただけである。

それを勘違いされ、しかもなかなかタイミングを見出だせず、さら  
にかなりの力で抱かれている。

遺伝というのは不思議で、馬騰と馬超の髪の色は全然違うのに、胸  
の発育は似ている。

母親の馬騰の母性は素晴らしいものだ。

よつて、ぶつちやけ陽は窒息しそうなのである。

しかし、馬騰と韓遂の二人はにらみ合いで気付くはずもなく。  
そんな一人の様子に馬超はあたふたとしている。

(志なんてないが、半ばで死ぬのか俺は!  
頼む!誰か助けてくれる奴はいないのか!)

必死にもがき、偶然、合い言葉?を強く囁く。

「ううにこるぞー。」

すると、馬岱が名乗りをあげて一人のにらみ合いで参加。  
陽が死にそうだ、ということを伝えにいく。  
小悪魔的な笑みを携えて。

結果、助かりはした。

だが、陽に助かつた氣はしなかった。  
何故なら、隣で妹分が寝ているのだから。

(H A H A H A ! なんてこつた ! )

意味分からぬテンションで頭を抱える陽。  
救つた代わりに隣で寝かせる、と要約するといふな感じの要求をされ、こうなった。  
(いひなつたら自棄だ ! )

結局、馬岱を抱き枕にして寝てしまった。

正直、今の陽に家族 なつたばかりだが と呼べる者のぬくもりが有り難かつた。

翌日、馬岱と顔を会わせる度真つ赤にして逃げられたのは余談であるが。

陽はこの時を振り返る。

「今、俺が俺で居られるのは一人、いや家族皆のおかげだ……。本当に感謝してる」と

## 第六話

正式に馬家の一員になつて 真名も改めて交換し合つて 早一週間を過ぎたころ。

陽はまた城の上に登つていた。

前回もなのだが、どう登つたのかは触れないでおこひつ。

陽がわざわざここにきた理由があつた。

それは、新たな悩みが浮上したからである。

陽は悩み、疑問など頭脳労働をするときは一人熟考するタイプなのだ。

故に、一人になりたいのだがこれがなかなかにして難しい。睡眠以外、ほとんど一人でいる時間がないのである。

半分は納得できた。

何故なら自ら望んだことだつたから。

しかし、もう半分はそうではない。

「母さんとの鍛練がキツイ」

陽の義母、牡丹との鍛練こそが陽の新たな悩みであり、一人でいる自由時間が出来ない理由だつた。

(何故だろうか？)

俺、別に頼んでないのに強制的にやらされているんだよ？)

そう考えてみたが、理由は正直わかつっていた。

しかし、今一度原点に戻らないとやむせない気分になつてきただ陽は、振り返ることにした。

(あれは、薊さんに相談した時からだつたかなあ……)

### S·i·d·e 薄

「母さんの、いえ、家族の旨に恩返し出来るぐらい役に立ちたいです」

「……は？」

「だから、兵法とか、教えてくれませんか？」

儂は耳を疑つた。

あれだけやる気のなかつた奴がこつまで変わり、あまつせえ教えを乞いに来るとは……。

まあ、前回は無理矢理だつたからの、当然とは言えるのだが。

「ちよ、あのー」

「お、おお、すまんの。つむ、心得た。……じゃが、条件が一つある

「なんですか？」

「堅つくるじこ言葉使ひはやめぬか。家族内の約束でもあつたで  
あううが」

「あ、ああ、そういうやうでし……だったな。うかりうかり

額を軽く叩く陽。

なんじやうひ、凄く腹立たしい。

「全べ……」

「でもや、人に頼むときは誠心誠意でするもんじやないすか?」

「ま、まあ、それはじやな……」

「むう、言こぐるめられてしまつた。

この辺りは本当に牡丹と似ているところじやな。  
まあ、この際じや、それは置いておこう。

「よし、では早速やうひではないか!」

「あ、無理矢理話題変えたね」

「う、うわー！」

クスクスと笑つてある。

まあ、こは年の功で抑えて……だれじや、儂を歳だといったのはー。

「……? まあ、頼んだ俺もあれなんだけど、積み上がつた書簡の  
山々はどうすんの?」

「……あ

「あつはつはつはつ。これ借りてきますね。時間が出来たらまた  
お願ひしますわ」

何冊か持つてでていったしました。

笑われたのは癪に触つたが、まあ良しとしようではないか。  
今はとても気分が良いからな。

何故つて、牡丹に自慢出来るのじやぞ？

フフフ……牡丹の狼狽える様子が容易に想像出来るのう

しかし、笑顔を見せてくれるとは……。

一昨日までの奴と同じ人間だとは到底思えんわ。

この日、薊と顔を合わせた者たちは一様に、  
「韓遂様の笑みが黒い……」  
と言つた。

そしてその夜、案の定牡丹の、

「ななな……なんですってええええ！」

と、某未來の特盛金髪ロールぱりに狼狽した声が城内にこだました  
といつ。

そしてその翌日、笑顔だが決して目は笑っていない母さんと会った。

「役に立ちたいからって、薦を頼つたのね？」

「……まあ、そうだね」

なぜか薦、の部分を妙に強調させてくる。

嫌な予感はするのだが、事実だから同意で返答した。

「何故私のところに来なかつたのかしら？」

微かに額に青筋がたつてゐるのだが、……全くもつて意味がわからん。

「それはわかりきつてゐるでしょ。母さんが太守だから遠慮しておいでだけじゃん」

母さん」と馬騰は、ここ隴西の太守なのである。

蒲公英の行動から身分といふか、立場的にお偉いさんだとは思つていたのだが、まさか太守とは思つてなかつた。

毎日飯作つて顔見せて、としてたから、何んだけ暇な役職なんだ、と思つていたんだけどな。

それを知つたのも、ここ隴西が涼州のかなり西のまゝであることを聞いたのも昨日のこと。

自分自身、こんなに西に来ているとは思つてもみなかつた。

「それでもよー、まあ、それはもういいわ。……役に立ちたいのよね？」

「……まあそれは、うん」

「じゃあ、そうね槍を扱えるよ！」になつてもいいわ」

母さんは満面の笑みだつたが、俺は盛大に顔がひきつっていることだろ？。

「ここは西涼。漢の領土の北西端に近い位置よ。故に、主に北の匈奴と西の羌からの侵攻を防がないといけないところなの。……たとえ漢に服していくても、いなくともね」

真剣味を帯びた母さんの言葉につぶ、とついあえず首肯する。

「そして、主な戦力といつと向こいつも同じだけれど、騎兵なの。……ここまで言えばわかるわよね？」

「俺が戦にでるのはすでに決定事項なのね……」

「当然じゃない」

わかつていたことだが、一応、肩を竦めておく。

「もちろん、陽の剣の実力には一目置いているわ。……けれどね」

「馬上じや使えない、って訳ね。……ハア」

「そ 理解が速くて助かるわ」

「すぐ頭を抱えたい事態になってしまった。

「さて、早速始めるわよ！　私の息子になつた以上、手加減はしないわよ！」

「……政務はどうすんのさ？」

「あんなもの、薊に任せたわ！」

おいおい、本当にそれでいいのかよ。  
結構やべーだろ。

つか、勉強の時間が無くなるじゃんか。

「いいのよ、一人で交代してやるから。勉強の時間は無くならないわ」

出来れば、心は読まないで欲しいんだが？

「無理　　そうね、蒲公英と翠を呼んで、調練場に来なさい」

コイツ、うぜえw

な感じは本気で腹が立つたぞ、このやつ。

三人で向かった後は、俺と蒲公英は基礎固め、翠姉　歳はさして  
変わらないだろうが、母さんの長女といふことでこりよんでいる  
は鍛え直しの猛特訓という地獄のよつな一刻を過ごした。  
昼を挟んで、俺と蒲公英（翠姉は逃げた）は薊さんとお勉強会……  
というより講義？を受けた。

……それから昨日まで一週間、一人からまるで腹いせか、ハツ当たりを受けているかのような怒涛の日々だった。

(つか、なんとなくすんなり頭に浮かんだが、地獄つてなんだっけ?)

そう一瞬考えたが、今浮上した疑問も、牡丹の若干正統性を持つた、理不尽とも言つべき鍛練と称した暴力さえも、今の陽にはどうでも良かった。

何もかも忘れて、今はこの僅かばかりの休息を享受したいのだ。現実逃避だ!といわんばかりに、陽はふて寝した。

一刻ほど経ち、城下の騒がしさに陽は目を醒ます。人々からは、称賛の声があがっていた。

(ま、多分母さんの軍かなんかだらうさ)

心底どうでも良さそうに見下ろしていると、蒲公英が庭を駆けずり回っているのが見えた。

十中八九、自分を探しているのだらう、と陽は思つ。

そういう役回りをいつも蒲公英が担つていたので、そつ予想する。

(まあ、困らない程度に降りてあげますかね。困った蒲公英を見るのは楽しいんだけどや)

若干酷いことを考えながら、陽は降りることにした。

その後、蒲公英と合流して玉座の隣の部屋に向かった。

合流時に、

「もう！ お兄様！ あんまりわかりにくいことしかないでよね！」

と、陽は怒られた。

高い所に隠れず居るのだから、ある意味滅茶苦茶わかりやすいのだが、城の近くからでは流石に見えないのである。

ということは、とりあえず陽は謝罪することにした。

部屋には既に翠もいた。

そのまま牡丹達が来るまで、陽、翠、蒲公英は待機するしかない。三人が玉座に入らない……入れない理由はたった一つ。正式な臣下ではまだないからである。

いくら君主の親類であろうが、一応は兵として段階を踏む。家族だから、高い身分の血があるから、といつ理由では、この地で昇進することは不可能である。

外敵からの防衛ラインの前線である地で、そんな甘えは通用するハズがないだろう。

因みに、翠はもう軍に所属しているが、まだ玉座に入れほどの地位ではないらしい。

それについて、聞いてみた陽。

「あんだけ強いのに、まだ将じやねえの？」

「お前に負けたから、下げるはたんだよ！」

あともう少しだつたんだからな！

と、続けて叫びながら陽を軽く殴る翠。

それは自業自得じやね？

と思った陽だつたが、言葉には出せず、理不尽な暴力を甘んじて受けたことにした。

かなり痛そうだったが、こういったスキンシップが陽には嬉しかったようだ。

陽は決してMではない。

そのようなことは断じてない。

(これは大事な事である)

さらに半刻ほど経ち、牡丹、薔、そして陽の知らない一人が入ってきた。

「あつ、山百合さん、瑪瑙、おかえりなさいー！」

「山百合、……お疲れ」

「……只今戻りました」

「なーんか、年下から呼び捨てつてやつぱしつくりこないわ。それで、翠はボクに対しての労いはないのかしら?」

「うつせ!」

片膝をつき、右の手で握った左手の拳を覆っている、紫紅色の髪を後ろで一つに束ねた者。

据わった目で翠を見て腕を組んで立つ、褐色の髪をツインテールにしている者。

前者は真名を山百合、後者は瑪瑙といった。

勿論、陽は一人を知らず、二人も新たな家族が増えているなど知るよしもなく。

「こいつ誰?」

「この方はどうぞどちら様でしょうか?」

「お一方は一体誰なのですか?」

と、三者三様に質問するはめになつた。

最初は瑪瑙、自然体に……いや適当に。

次は山百合、少々含みを持った笑みを浮かべて。

最後に陽、丁寧語で笑顔と言う名の仮面で覆つて。

端からだと、穏やかな様子に見えるだろうが、居合わせた四人には一触即発なムードにしか見えなかつた。

陽は語る。

「二人との出会いは互いに最悪な印象を持つてたなあ」と

## 第六話（後書き）

蒲公英 だというのに、未だ蒲公英成分が少ない、だと……！

## 第七話（前書き）

遅々として進まねえ……。

## Side 陽

何とも言えない険悪なムードに、とうあえず母さんが仲立ちとして入った。

「陽。この二人は鳳徳、そして閻行。そして、山百合、瑪瑙。この子は馬白よ」

……あ、そういうや俺、馬白ってんだっけ。

母さんから貰つたのは良いが、使う機会が皆無だつたから忘れてた。髪が白いからって理由で名付けた　〔冗談らしかつたが　　と言つたときは流石に殺意を覚えた。

本当はきちんとと問い合わせ、理由を聞いてやりたい。  
けど、どうせはぐらかさるるだけだろうと思つたので止めた。  
まあ、こんな話、今はどうでもいいんだが。

「馬、ですか？」

「そうよ」

「……ならば。……私は鳳徳、字は令明、真名は山百合と申します。宜しくお願ひいたします」

拳と掌を合わせて一礼する鳳徳さん。  
律儀だねえ。

「ボクは闇行、字は彦明、闇艶なんて呼ばれたりもするわ。どれでもお好きにビーザ」

心底どうでもよさそうな闇行さん。

難儀だねえ。

「姓名は母さん……いえ、馬騰より頂きました、馬白と申します。  
どうか宜しく」

相手も名乗ったことだし、とりあえず自己紹介しておべ。  
差し障りのない笑顔でも振り撒いておこうじゃないか。

……と、なんとなく昨日のことについて回想に入つてみた。

誰の為にとは聞かないでくれ。

そんで、だ。

俺が鳳徳さんに持つた印象は、いけ好かない人、というものの。  
まあ俺の場合、含みのある奴と勘織ろうとする奴には大抵もつ感情  
だが。

闇行さんに関しては、嫌な奴だ、と言つか嫌いな部類に入る奴だ、  
と思った。

俺などどうでもよさそうで、明らかに差別的、侮蔑的な目で見てい  
た。

散々そういう目で見られていたので、別に表に露にするほど怒り  
は感じねえし、俺はそんなに愚かでもねえ。  
どんな感情も笑顔で全て包み隠す。

それが、この腐った世を生き抜く為に必要なモノなのぞ。

なにに対して持論を語つてんだか、俺は。

そんなことはさておいて。

多分、俺が持つて印象と同じように思つてゐる一人だろうが、なるべく仲良くしなくちゃならない。

「だつて、家族だかんな」

これは母さんの受け売り。

家族は大切な存在よ、と再三言われてゐるもんで染み着いた。  
それに救われた俺自身、余程の事がない限り染み抜きはしないだろ  
うし、出来もしないだろつ　主に母さんの所為で。

まあ、黒に垂れ、じわりと広がる白を、染みと言つかは定かではな  
いけど。

そんなことを考えながら、朝日の光も射し込まない中庭で拳を振る  
う陽。

誰かに教わつた訳ではなく、見よう見まねで覚えたので我流の拳法  
であるが。

これも一日に一回の日課だつたりする。

何故早朝、それも日の昇つていないとやるかといつと時間がな  
いものもあるが、何より見せ物ではないからであつた。

その後日が昇る頃には、剣の鍛練、朝食を挟んで槍の鍛練へと続く。

(せういや、今日から槍の基礎から基本に移るつて言つてたつけ)

と、陽は呟く。

なんにせよ、面倒な母との鍛練があるといつ事実に、陽は嘆息した  
かつた。

(つと、違つことを考えてくる場合じやなかつたなあ)

自らに言い聞かせ、強制的に思考を修正する陽。

鍛練のことも大変悩ましいが、一人との距離の詰め方の方が今は大切だ、と考えた為だ。

(さてはて、何日かかるんだろうかねえ？)

これからを考え、小むく息を吐いた。

延々と考えてゐるうちに口は昇り。

わざに剣を振るつて半刻たち、蒲公英がやつてくる。

「なあ蒲公英……どうしゃいこと懇つへ

「なにが？」

中庭から部屋に戻るとき、陽は蒲公英に相談してみることにした。そういうや主語が抜けてたなあ、と思いつつ、一人の事を聞いてみた。

「百合さんは、寡黙な人だから積極的に話してみた方がいいと思うよー。蒲公英たちがお兄様にしたようにね」

(あそこまでやられると多分きついと思うんだが)

四人で、弓兵が間断なく放つ矢のように自分のところに来られたのは本気で鬱陶しかった。しかしながら、途中からは若干嬉しくなっていたが、ので、そこまではやろうとは思わないが、参考にすることにした。

「んで、閻行さんは？」

「んー……、わかんない」

思わずすつこけそつになる陽。

最初は何でも聞いて、みたいな自信のある態度だったのに、分からないとあっけらかんと言われたら、そうなるのも無理はないだろう。

(しかし、思案するときの行動がいちいち可愛いなあ)

今も口元を人差し指で押さえ、首を傾げる姿になんともいえなくなる陽。

「お兄様？」

「……っー？」

惚けてていた陽を心配になつたか、蒲公英は顔を覗きこむ。

「さきなつのこと、元気でキラキラする陽。

（つたく、不意討ちなんだつてばやー。）

「どうかしたの？」

「……何でもない」

「ふ〜ん。あつ、瑪瑙のことは薺さんで聞くといいよ」

「何故に?」

「瑪瑙は薺さんの娘だからだよ。……義理の、だけれど」

確かに仲がいいな、と思つ節もあつたがさうこいつだったたのね、  
と陽は思つた。

そういうしてこるひたちに、部屋につく。  
どうやら陽と蒲公英が最後であった。

陽は静かに謝罪の意で一礼してから席につき、蒲公英は陽のそんな  
様子に首を傾げながらも席についた。

「盗撮つたわね では、頂きますー。」

「…………頂きます」「…………」

朝と夕は可能であるなら、なるべく家族皆で食事をすること。  
食事始めと終わりは声を揃えて挨拶すること。

この一つは、牡丹がつくった家族間でのルール……鉄則、捷と言つても過言ではないものだった。

### Side 陽

「…………」馳走様でした」「…………

「はい、お粗末様でした」「…………

食事は滞りなく終わった。

昨日の夜と合わせて、二度目の家族全員での会食。

昨日は全く口を開かなかつたけど、今日も、とは流石にいかないのか振ってきたので、不躾にならない程度に答えておいた。

「そつそつ、今日は時間ができないから、三人は山百合から指南を受けること。いいわね？」

「うげっ！ 山百合のかよ～」

「…………翠様、それは挑発と受け取らせて頂いても宜しいでしょうか？」

「うへー！ ううう～、陽！」

翠姉が最初に目についたのが俺のようであるが、我、関せずを決め

込むぜ。

俺には関係ねえし。

まあ、とりあえず、日を明後日の方へ向けておいた。

鍛練に向かうときには殴られたのは余談である。

「さあ翠様、始めましょうか」

「なあ、山田合、朝のはだな。その、……言葉のあやつて奴でな」

「……朝の発言は関係ありません。……半分は、ですが

中庭の真ん中には、翠姉と鳳徳さんが対峙していた。

翠姉はいつもの十文字槍を携え、鳳徳さんは双戟とでも言つかね?とにかく、片腕ごとに一本ずつ戟を持って自然体に構えている。

鳳徳さんを見れば見るほど感じるものは一つ。

(強い)

今まで観察していて、立ち振舞いといい、纏う雰囲気といい、そして今の構える姿といい、半端じやないとthoughtた。

翠姉……御愁傷様です。

陽が翠に対して合掌した直後に戦局は動いた。

翠から、先ずは一突きと言わんばかりに、鳳徳の心の臓を神速とは言えないものの、それなりに速い速度で突く。

そんな一撃を、両腕の戟を胸の前でクロスし、いつも簡単に防ぐ。母さんとの一週間の鍛練でここまで変わるのか、と陽が思つほどいの重さと速さの一撃を、ある

「……翠様、お強くなられましたね。ですが　「うわっ！」  
まだ踏み込みが甘いですよ」

たった一撃で、鳳徳も翠の田まぐるしい成長に気付いたようだ。  
しかし、簡単には褒めることはせず、更なる力で叩く。  
変な自信をつけさせない、傲らせないためである。

ムチが圧倒的に多い、アメとムチの鍛練が鳳徳独特のスタイルである。

その為、白馬の女王様とか氷帝などといった二つの名があつたりするとかしないとか。

Side 陽

半刻後、翠姉の番は終わった。

相当叩かれたようで、真っ白に燃えぬきていた。  
おてての皺と皺をあわせて、南へ無へ。

「死んでない！」

俺ですら元ネタが正直わかつてないのに、よくツッ「めるよねえ。」  
こういう場面で使うということだけはなんとなく覚えてたけどな。  
ん、間違ってるって？

……しらんがな。

俺の変な記憶にいえや。

「誰と話してるの？」

蒲公英さんや……ヤバい奴見るような田舎マジで勘弁してください、  
俺の心はガラスでできています。

あれ、ガラスって何？

またか、俺の変な記憶！！

このままじゃ無限ループになり……ループってなんだああ！

自爆して、突然頭をぐしゃぐしゃに掻き回す俺を、蒲公英と鳳徳さんはひいていたが。

他人なんぞ構うものか！

冷静さを取り戻した俺は、楽しい楽しい独り言（泣）を終わらせ、  
鳳徳さんの向かいに立つた、否、立たされた。  
いやいやいや、まだ基礎習つたばつかですよ。  
なんていきなり実践形式！？

と、いろいろ考えながらも表情には出さないが。  
ひとえに、人間の学習能力の賜物と言えよう。

「……では、きてください」

「……ハア」

あんまり乗り気にならないんだけどね……正直面倒だしな。

俺は基礎に習つた通りに槍を振つていく。

突き、払い、降り下ろし、このみつちり教わった三つで、相手の急所、鳳徳さんがわざと作つているであろう隙を的確につかっていく。

「……これならば問題ないですね」

小さく呟く鳳徳さん。

何故だらう、凄く嫌な予感がする……。

乱世の最中でも、この笑顔は無くしたくなぬよなあ、と漠然と思つた。

陽は語る。

「蒲公英に特別な感情を抱いたのは、突き詰めればこの頃からかも知れないなあ」と

## 第八話（前書き）

まだまだ進まない。  
ほのぼのが続くぜ！

「陽、軍に入りなさい」

「俺、まだ槍術基本。OK? 軍? は、問題外」

「却下。師たる私が良いといつのだから良いのよ」

「却下は却下だぜ。足引っ張るだけだからんな」

「却下の却下は却下。想定内よ、それは。元から協調性がない」と  
ぐらい分かつてゐるから

「却下の却下の 「ええい、喧しい! 却下却下五月蠅いわ!」  
ぬう」

陽の勘は当たってしまった。

いつも通り家族全員で食事を済ませたときに陽は牡丹から通達され  
た。

反論は勿論したが、それも悉く返されてしまい。  
陽が折れることで、話は収束した。

陽は盛大に頃垂れていたが。

## Side 牡丹

元々、山百合たちが帰ってきたら、陽を山百合の率いる部隊に入れることは決めていたんだけどね。

もつ少し差の討伐には時間がかかると思っていたし、陽を鍛えるのにもまだかかるだろうと思っていたのに。

それを山百合が認める程に成長してゐるなんてね。

……ホント、良い意味で裏切ってくれるわ。

全く、流石私の自慢の息子、としか言いようがないわね

「あ、そだ、あれも陽に任せよつかしく……」

この私でも出来なかつたんだもの、一筋縄ではいかないと思つけれど。

ま、山百合を認めさせるなんともひと至難の業なんだけれどね

「陽～ ちよつとおいでー。」

顔がひきつつてゐるわ。

全く、失礼しちゃうじゃなー

Side ???

俺は元々、三流とも言えないほどのクズに飼われていた。

そいつは気が短く、気に入らないことがあれば直ぐに他に当たり散

らし、気に入らない奴がいれば殴り、なぶり、そして棄てた。  
そんな奴が、俺にだけは決して何もしようとした。

むしろ、可愛がった。

俺がどんなに拒もうとも、へりくだり、責ぎ、俺に必死で気に入られようとしていた。

俺は世間から賢いと言われている。

他の奴らに劣る気も、引けをとる気もさうもない。  
だからこそ気に入られた。

……願つてもいきないクズに。

気持ち悪い！

クズが俺に触ってくれるな！

幾度も、幾日も、幾月もそう思っていた。  
そしてそれと同じ回数だけ嘆いた。

何故俺だけ違う！

頼むから解放してくれよ！

と、何度も何度も。

さらに、現実は甘くなかった。

……何故お前だけ。

……お前だけが幸せで。

……お前だけ愛されて。

そんな敵意の籠った目で見られるようになつた。

違う！

俺は奴なんかに愛されたくない！

俺はこんなところで生きていたくない！

と、何度も叫んだ。

しかし、そんな声が届くはずもなかつた。

だから、俺は逃げた。

数日数週間かけて、繫がれた縄を食いちぎつて。

幸いにも俺は脚が速い。

振り切ることなど容易かつた。

だが、外を知らなかつた俺は懸けて、賭けて、駆けるしかなかつた。

それが一番身を守ることに繫がることぐらいは知つていた。

だがそれも、長くは続かなかつた。

疲労の蓄積と満足でない食事は、徐々に身体を蝕んだ。

そして俺は、崩れ落ちるような感覚に陥つた。

……その朦朧とした最中で人影を見たのは、何故かはつきりと覚えていた。

どれ程の時間が流れたのだろうか。

俺は人の膝に頭を預けていた。

何故だか不思議と心地がよかつた。

「ほれ、やるよ」

今日は朝から何も食べていなかつたので、一心不乱に食べてしまつた。

あ、ああ～、俺のがあ～、といつ嘆きの声には少し罪悪感を感じた。まあ、仕方ねえなあ、と呟いた後で。

「ちよっとここを深く入ったとこに水場があるから、後でいけよな

と、優しく撫でながらそう言つてくれた。

新天地で、あのクズでない人に優しく、慈しむよう見てくれるその銀の隻眼が無性に嬉しかつた。

「さてと、そろそろいくわ。ま、ちゃんと休むひつたな。……そんじゃ、達者でなあ～」

と言つて、行つてしまわれた。

この恩は決して忘れない、と心に刻みこんでおいた。

ふと思えば。

こんなに短時間しか一緒にいなかつたのに、もう寂しいと感じてしまっていた。

……ついて行きたい。

そう思つた。

だが、それを俺自身が許さなかつた。

動けないのがこんなにももどかしいと感じたのは、初めてかもしれない。

しかし、”主”からの初の命令、ちゃんと休め……こう考へると自然と嬉しくなつた。

(未来の我が主よ……再び相見えることを)

俺は天を仰ぎ見た。

それからは、目的をもって走るようになつた。

我が主を求め、ひたすらに走つた。

そうしたら、ある軍に遭遇してしまつた。

「なんだ、ここいつ？」

「……まあ」

「十分な体調じゃなこよひね。……母様たちに任せます？」

「……それが最善でしう」

抵抗はしてみたものの、弱りきっていた身体には酷なことだつた。

そして、今、俺は保護という形でここにいる。

最初、俺には捕らわれてゐる、とこう風にしか感じられなかつた。

一刻も早く主に会いたいのにこんなところで立ち止まつてゐる暇などない！

ここから早くだせ！

我が魂の叫びを聞け！

そう、ずっと思つていた。  
だから暴れたりもした。

「誰かが、誰かが私を呼んでいる！」

そこに、まさか反応する奴がいるとは思っていなかつた。

「安心なさい　捕らえる気なんてないわ。……あなたみたいない子には是非ともいて欲しいのだけれどね」

そう言つて、撫でてくれた。

主並の心地良さがあつた。

主に似ている、と感じた所為なのかは分からぬが。

「心に想い人がいるようね。……まあ、簡単には諦めないわよ。」

主を見つけていなかつたら、この人を主だとしていたかもしれない。不覚にもそう思つてしまつた。

だから、少しの間だけ留まってみようと思つた。

その判断は間違つていなかつたと証明される日がこんなに早くやって来るのは思つてもみなかつた。

「だから、痛いつてのー。」

耳引っ張られるとか、尋常じゃないです、はい。

心底嫌そうな顔をしたのが気に入らなかつたらしい。

そんなこと言つたつてしようがないじゃないか！

だつてどうせ面倒事だもの。

「ほら、ついた。ちょっと待つでなさい」

俺と母さんと蒲公英と鳳徳さんは、ある小屋のそばにある広場に来ていました。

正確には、俺だけ耳を引っ張られ、連れて来させられたんだがな。鳳徳さんは保護した責任者として、蒲公英は暇潰しと興味本意でついてきていた。

そして母さんがその小屋へ向かい、俺たち三人は待つことにした。

……因みに、俺と鳳徳さんの間の険悪なムード（？）は、鳳徳さんがある程度認めてくれたことで払拭されたさ。しかしながら、まだきこちない感じだから、どちらから口を開く、といつのはないけどな。

そうじうじうする内に、母さんがとある馬を引き連れてくる。

あれ、あいつは……。

「…………あの馬鹿馬か？」

「ほえ？ 馬は馬鹿じゃなこよー」

「それは知ってる。……知ってるけどさ、俺を生命の危機に追いやつた奴を馬鹿と呼ばずしてなんと呼ぶー」

「生命の危機？……あ～！じゃあ、あの子がお兄様の食料を？」

「まつ、そゆこいつたな」

でも食料がなくなつてなかつたら、森に入る必要もなかつたからなあ。

……だつたら全ての始まりはあいつとの出会いからなのかもしけない。

感謝すべきかねえ？

「あつ、ちよつと待ちなさい。」

母さんの声が聞こえたと思つたら、すげえ速さで走つてくる奴がいる。

まあ、あの馬鹿馬だけど。

いや、待て。

……その速度でこいつ来んの？

止まるどころか、さらに速度あがつてますよ？

流石にあせるぞ？

待て待て待て、ぶつかるときのエネルギーって半端ねえんだぞ！  
速度は2乗するんだぞ！

ひとつに思い出したやつは知らんが……俺、確実に死ぬぞ！

「ちよつ、とま　ひでぶつ！――」

ちょ、視界が、グルグル、回つてるな。

ああ、これが、フィギュアスケートのジャンプして人の気持ちな

んだろうか。

そろそろ現実逃避はやめ  
ぐべつはあつ！！！

地面上に叩きつけられる俺。

「こいつでええええーー！」

無茶苦茶痛え。

あれ、ちょっと待てよ。  
……（身体を確認中）。

馬鹿な！なんともないだと！

骨折ぐらいあつて然るべきな衝撃だつたぞ！  
こいつ、これがギャグ補正と言つやつなのか！

……何も言つた、俺が一番わかつているから。

そんなことよりさあ……。

「つか、何で頭突きーー？　お前は恩を仇で返すのかーー。」

ブルッ、と鳴いた。

（そんな気はなかつた）

とのこじりしい。

え、何でわかるかつて？

俺は動物たちの気持ちはなんとなくだがくみ取れるんだよ。

ずっと動物だけが友達のボッヂだつたからな。

「ふうん、想い人つて陽のことだつたの」

「想い人つてなんだよ、気持ち悪い。……こいつオスだぞ？」

何時の間にか近くにいた母さんが、変なことを呟く。  
生物としての壁を超えるだけでなく、男色に靡けといふが、この母親は。

「何を馬鹿なことを考へてるかは知らないけど。背を預ける主という意味よ」

「……主い？ ちょっとさ、話の飛躍度が半端じゃないんだけど」

「その子に聞いた方が早いと思つただけど？」

「確かに」

……いや、馬と会話できるのが当然、みたいな」のやうと、頭おかしいだろ。  
まあいいけど。

とりあえず、聞いてみた。

「それで。どうして俺が主？」

（貴方は命の恩人だ。それに、俺は貴方に惚れた。だから、俺の背を貴方に預けたい。駄目だろうか？）

「惚れた、て……。まあ、いいか。これから戦場に出ることになる

だらうが、宜しく頼むわ」

ブルッ－（おひれー）

俺が応えてやれば、ここ一番の大きな返事をする。つか、そんなに嬉しいのかよ。

「……この子の名前はどうあるのですか？」

……ここに来て、初めて口開いたな、鳳徳さん。  
まあ、問題ないけど。

「つへん？」

びつよつか。

漆黒の毛……なんつーか、記憶の片隅にある黒  
叫つてやつよつ細  
いしなあ。

脚はかなり速く、立派なたてがみ。

……カスケード？

うん、何故だかわからんが凄くしつくづく。  
しかし、そのまま使つたらいかん気がしてならない。

うむむ、びつよつ。

ま、ここは無難にいくか。

「毛が黒で、兎のように脚が速いから、今日からお前は黒兎だ！」

赤兎馬つて、こんな感じで名前つけられた、って聞いたことがある。  
我ながらかなり適当だが、喜んでいるようだし、まあいいか。

「一筋縄でいつてしまつたわね。……つまんない」

母さんがふざけたことぬかしてやがつたが、ここは抑えてやるわ。

戦場の苦楽を共にする、人馬の主従はこんな出会いだつた。

陽は語る。

「黒兎は俺の最高のパートナーだな。……しかし、カス○ードって呼びたいな」と

## 第九話（前書き）

今更ですが。

鳳徳の鳳は本来、广に龍です。

でも、ひなりんもこの鳳だし、いいか、みたいな考えです。

「えーと、私は武官として山田合戦の部隊に入る予定だったと思うんですけど?」

「やうよ

困惑した様子で質問する者に、淡々と答える。  
質問者を見る素振りもない。

「じゃあ、何故太守お側仕え兼侍女みたいなことをさせられているのでしょうか?」

「侍りせておきたいから?」

「何故に疑問形ですか……。で、最も聞きたいのは、この名札の置かれた机と、そびえたつ書簡の山はなんなのですか…?」

「貴方専用の机と、仕事だけど」

「見りやわかるわ! じゃなくて、どうして文官みたいなことをさせられやがになつてているのかを問うていいんです!」

困惑から怒りに一瞬変えるが、それを無理矢理抑えて、あくまで丁寧語で書簡の山を指差して問い合わせる。

それに答える者は、満面の笑みを浮かべ、親指をグッと上げてみせた。

「貴方が文官候補だからよ」

「その幻想をぶち壊す！」

書簡の山にパンチする。

勿論の如く、大きな音をたてて崩れさつた。

「あ、自分で倒したたのは自分で責任持つて片付けてね」

「ち、ちくしょおおおおーー！」

今にも泣き出しそうな声色で、しぶしぶ山を積み直し始めた。

今までの一連の流れを演じたのは、言わずもがな陽と牡丹である。いつも、暇な時間は侍女紛いなことをやらされていた陽であったが、今日初めて牡丹の政務室に来ると、昨日までなかつた自分の名入りの机に気付いた。

かねてからの疑問であつたこと 何故侍女紛いをやらされていたのか を共に聞いてみれば。

なんということでしょう、自分の知らないこところで役職が増えているではありませんか。

陽はそんな状況を開拓する一手を打とうとしたのだが、あっさり返された為、惨めに片付けをしていくのであった。

Side 陽

どうしてこうなった！！

何時の間に文官候補になつたんだよ。

何時もの一連の流れは。

母さんのお茶を淹れて、母さんからの質問に適当に答えて、ただそれだけの……あつ。

……思い返してみれば、母さんは政治的な質問しかしていなかつたつけ。

さらば、たまに書簡まで見せて聞いてきたこともあつたよつな……。

……うん、俺か。

そつ、それでも一言あるつてもんでしょ、普通！

「じうせひと悶着あるのだから早ことに終わらせたかったのよ

だから心を

「それに、解るでしょ？ うちは文官が少ないのよ。……一人でも多く良い人材を集めるのが、太守の務めではなくて？」

ぐうの音もでません。

流石と言つべきなのか、何と言つべきか。

……真面目な母さんに感服したぜ。

「ほりつ、ほーつと突つ立つてる暇なんてないわよー」

「うー、了解

丁寧語は、まあいいか。

(面倒くさがりだけど、根は素直なのよね)

黙つて席に付いて、仕事を始めだす陽を見て、牡丹は思つ。だからこそ、有無を言わせないようにならねたのだが。その行為が、陽を騙しているようで牡丹は心が痛かった。

しかし、自分は太守。

私情をはさんだ事を言つてはこられない。  
文官の数が少ないことは、死活問題だからだ。

(陽はいろいろな面で頭が回るから、せつと解つてくれる……。解つて、くれるつ)

だがやはり、内心ではとても歯噛みしたい気持ちだった。  
無理矢理に自分に納得させようと聞かせて、やはり葛藤は避けられないのだ。

牡丹という女は、どうしようもなく母親だった。

(それにしても、わざきの陽の受け様はなんだつたのかしら?)

嫌なことをこれ以上考へることを止め、ふと思つたことを心で呟く。  
(ふふっ、もしかして、母さんに惚れたり……?  
まあ、冗談か冗談じゃないのは別にして、もつと母さんのかっこいいといつ見せぢやねつかな )

牡丹はそれ以上の思考を切り上げ、政務モードの頭に切り替える。そんな母親の空気の変化を横目で見た陽は、一層真剣に取り組むこととした。

二人が没頭すると、そこには、さうさう、と筆を走らせる音と、時折書簡を積む音だけがするという、異常な空間が形成されていた。後々聞けば、二人のとんでもない集中力に、侍女たちだけでなく、他の文官たちも入るのをためらったといつ。

Side 陽

二刻後、そんなはりつめた空気が霧散する。

「あ、終わったあ！！」「

いや～、やっと終わった。

俺は一山、母さんは三山……とんでもねえです。  
いや、初めてだよ！？

かなりの健闘はしたと自分でも思うんだけど！  
すげえ集中力だったと自分で褒めてあげたい勢いなんですが。  
にしても、大分時間経つた気がする。

その証拠にほら、口が傾いてきて……あ、っ。

「あ、ああああ！！」

そういえば、本日、山百合さんの部隊の召集がかかってたっけか……！

せつかく、最近改めて真名の交換をしたといつのこと、速攻で信用がた落ち。

……オワタ（・・・・）

駄目だ鬱だ死の

……いや、こんな弱氣でどうする！

正当な理由があつたのだ！

これを使わない手はない！

俺は、断固として戦うぜ！

さて、と。

……死地に赴くか。

横田で見えた母さんが、どこか笑つて見えたのは氣のせいだろう。

修練場に来ると、たくさんの兵隊さんがいました。

こんなにはいるのか。

……やだなあ、出来なくはないけど、集団行動とか苦手なんだよな

あ、俺。

そんなことを思いながら歩いていた、真打ちが登場した（汗）  
いやまあ、ずっと正面にいたんだだけだ。

「……これは」これは一刻ほど前の召集に応じずそのくせそのまた一  
刻後に急ぐ素振りもなく平然とやつて来られたる胆力の持ち主の馬白  
様ではありませんか」

「すいませんしたーーー！」

普段の寡黙さに背反して、息継ぎなしで皮肉る山田合戦に恐れをなした俺は、その場で土下座をし、頭を垂れる。

普段はお淑やかな人がキレると怖いってよくあるよね。

(因みに。)

陽が起立状態から土下座までの時間は、約0・5秒。  
土下座に入るスピードにタイムレコードをつけたならば、今のところ、1～10位まで全て陽の名で埋まる事となる。

そう今のところは、だ。

この後に、自分より素早い土下座をこなす君主が現れる」となび、  
陽は思つてもみなかつた。

……思ついたら逆に凄いが

#### 閑話休題

言い訳もなく、誇りもなく、さりとて臆面もなく。

それが俺が土下座する時の三大信条さつ！

いや、表に出さないだけで、バリバリにびびつてます、はい。  
そんな俺に何を思ったか、一つ爆弾を落とした。

「…………いのですよ、牡丹様から通達はでていましたから

…………。

えつ？

ふう。

オーケー、もちつけ、俺。  
よし、深呼吸だ。  
吸つて、吸つて、吸つて……。

「な、ななな、なんですよーーー！　土下座の意味ねーじゃん！  
なんで怒ります雰囲気醸し出してたかな！？　チクショオオオ  
！！　だから母さん笑つてやいがつたのかああーーー！」

はい、一気に吐き出す！

この、やり場のない感情に、頭を抱えて、かぶり振つてしまつた。  
周りから見ればとても痛い人に見えるだろうが、気にしねえ。

……完ツ全に騙された……！

怒りよりも脱力感が半端ねえ。

騙された自分に溜め息が自然にでるぜ。  
これを考えたのは山百合さんじやなくて、あんのビアホ母親だろ？  
野郎じやねえが、ヤけんな、コノヤロウ！

「…………ふつ…………くつく…………」

つていうか、山百合さんの肩が忙しく動いている。

……笑つてる？

あの山百合さん、か？

表情筋が本当に機能してるかわからぬ人が？  
いや、俺の前だけ無表情なのかも知れないけどさ。

見上げつつ覗き込むと、必死に堪えようとしているながらも、笑みが  
こぼしている山百合さん。

……うん。

「可愛いな」

あ、声に出てしまつた。

だけど、それくらい可愛いかつたんだよ。

まあ、田頃の面持ちとの差、所謂ギャップ（だつたか？）といつものがつたりはするが。

「……ふざけたことを言わないでください」

そう言って、いつもの顔に戻ってしまった。

別にふざけてる訳じゃなく、至極真面目なんだけどなあ。

元々の顔立ちは、可愛いといつより綺麗って感じ。

だけど、今のちよつと幼さも残った笑顔には可愛さがあった、いや、

ホント。

「……本田あなたのやる」とはありませんですがしつかり見ておく  
よ」「元気

まるで逃げるよつこ、兵たちに司令をかけにいつてしまつた。

あらり、残念。

まあしかし、貴重なものが見れたな。

今日は慣れなことしてとても疲れたんだ……役得として貰ひべからいいだろ？

ま、答えは聞いてないけどね。

た人がいた。

自覚がありますが、元から愛想が無かつたらしく、可愛いと言つてくれたのはその三人と、変態さん達だけでした。

……綺麗だけど、可愛げないよな。

……そうだな、厳しつつ一か、怖いつつ一か。

……冷たいんだろ。

……でも、その冷たさがまた。

他の男からは同じようなことを何度もいわれました。  
流石に最後の人みたいな人たちは殴つておきましたが。

毎度恍惚とした表情で倒れていくので、根深く記憶に残っています。  
その総評により、氷帝、白馬の女王様という別名がついてしまいました（乗っている馬は白なのでわかりますが、女王というのはよくわかりません）。

ついた当初は別段氣にも止めませんでしたが、牡丹様が「かっこいいじゃない」と言つので、今は好きだつたりします。

とにかく、私の中でのたつた一人の男性が亡くなつて十余年、私を  
可愛いと言つた者がいました。

新しく家族になつた子です。

最初に会つたときは、少々戸惑いました。

あの方に容姿が似すぎていましたから　髪は白く、目付きは悪かつたですが。

だから、本能で男を嫌う瑪瑙ちゃんと違つて、敢えて距離をおきました。

そうして、人となりを見ようと思つたからです。

結果は、合格です。

真名のように、輝いていて、イキイキしていました。

しかし、無邪気さの中に冷徹さも垣間見えたのも確かです。  
あの子の武は特殊で、冷徹さの集積といつていいほどに、田が、剣筋が、冷たかつた。

そこに惹かれ、認め、そして真名の交換をえしました。

そんな子が、牡丹様の手のひらの上で面白によつて踊るものだから笑ってしまいました。

そんな最中に不意に言われました 可愛い、と。

あの頃はまだ十代で、慣れない扱いに戸惑いと恥ずかしさがあつたのだと思つていました。

ですが、違いました。

慣れなどありませんでした。

柄にもなく焦りました。

とても恥ずかしかつた。

でも、どこか嬉しかつた。

だから、取り繕いました。

赤面していいか、それだけが心配でした。

そして、逃げました。

あれは、様々な感情からの逃避でした。

兵の指揮を名目に逃げる最中、忙しく辺りを確認しました。

逃げる私を自身で滑稽だと思いますから、見られたくないませんでしたから。

しかし、それ故に他に見ていた方の存在に気付いてしまいました。

「…………あう…………」

恥ずかしい。

顔が凄まじいほど熱をもつているのがわかります。

結果を見るべく、策を考えた人が近くにいることなど、考えればわかる」とでした。

.....。

くつ！ 陽君、許すまじー！

### S i d e 三人称

なかなかの逆恨みもいいところなことを考えていたが、その後すぐに山百合は修練場全体に聞こえるように指示を飛ばした。どうやら将モード切り替えることで、無事に熱を冷ませたようだ。

陽を陥れ、かつ二人の様子を伺いにきていた者、すなわち牡丹は眩いた。

「あとは、瑪瑙ね」

これがまた大変なのよねえ……、と嘆息した。

陽は語る。

「このときから、長い間ずっと悪寒が止まらなかつた」と

## 第十話（前書き）

基本的に地の文とかの呼称は、オリ主が真名を預けられたかどうかで変わります。

「で、なんでボクがアンタなんかに指南しないといけないのよっ！」

「知りません。母さんや薊さんにはこうしよう

「アンタ、母様達を侮辱する気ー。」

「誰もしてませんよ……」

(凄く面倒くさいです、ありがとうございました)

陽は闇行と共に、先日来た馬小屋近くの広場に向かっていた。  
何故なら、闇行の言つ通り、陽は馬術の指南を受ける為である。  
さらに、闇行が不機嫌なのは理由があった。

それは、

「ボク、アンタのこと嫌いだから

この一辺倒なのである。

陽と山百合、闇行が会って、そろそろ一週間が経とうとしているが、  
話をするまでには関係は進んではいるものの、まだまだ闇行との確  
執はなくなつてはいなかつた。

話といつても先の程度。

如何に距離が縮まつていかないのがが容易にわかることだらう。

その為、なんとか二人の関係の修復を試みようとする牡丹、薊の計  
画が、今回の馬術訓練に繋がるのであった。

「黒兎～！」

陽は、先日愛馬になつたばかりの馬である黒兎を呼ぶ。呼び掛けに応じ、すぐさま猛然と駆けてくる黒兎。牡丹が言つて、繫いでおくだけ無駄、とのことで黒兎はほん自由なのである。

しかし、陽の命令によつて馬小屋で大人しくしているのであつた。

Side 陽

相変わらず速いな。

そんなことより、顔面すれすれで止まるのは止めよ!せ。マジで怖いから。

そんなことを訴えながら、首を一回ポンポン、と叩いてやる。するとブルツ、と黒兎が鳴く。  
(では、遠慮なくぶつかれと?・)と聞いてきた。

……何故にそう解釈だよ。

まあ、多分冗談だろ!つ。

そう、思いたい。

「へえ～、仲がよろしいのね。……本当にアンタには見合わない良馬です」と

「ですよね～」

闇行さんは男を下にみる節があるっぽい。自分より弱い癖に威張つてる奴らがいるというのが癪に障るのだろう。

まあ、その点に関しては俺には関係ないけどな。  
弱くはねえし、威張つてねえ。

むしろ、下手下手に立ち回つてやつてる。

でも、その姿勢が嫌いっぽいから、本当にどうしようもないんだがな。

……ま、黒鬼が俺に見合つてないってのも事実なんだが。

「何笑つてるの、気持ち悪い」

おもつくれひこいやがる闇行さん。

知らず知らずのうちに笑みがこぼれていたらしい。

……自分でも気持ち悪いと思つたんだから世話をねえぜ。

「どうあえず、乗りなさい」

なんて無茶ぶりだよ、おこ。

ど初っぱなからなんの口うとかもなしですかーー?

指南者として、そればざつ。

「田嶋は一見に如かず、よ。わざと乗つなさいーー。」

なーんて高圧的なんだろうか。

残念ながら、俺は被虐趣味なんてないぞ。  
むしろ、じつ、なんといつか。

闇行さんみたいな高圧的な奴とかだと特に

「わざと乗れつて言つてるでしょうがーー。」

屈ませてやりたい。

「いや、俺は贔屓志向、じらっこ。

なんて、アホな思考をしている暇なんざなかつた。  
つたく、乗ればいいんだろ、乗れば。

馬銜と呼ばれる馬具を黒兎の口につけて乗つてみせる。

「（ふん……格好だけは一丁前ね） しつかり内腿を使つて、しめあげる気持ちで力をいれなさい！ 腰掛けるよりではダメよ！」

「いづ、ですか？」

何故だらう、凄えしつくりくるんだが。  
懐かしい、訳じやないんだが、そんな感じ。  
どうやつたら上手く乗れるのか、そういうのが身体から湧き出る感じだった。

### Side 三人称

「黒兎、ちょっとおもいつきり暴れてくれる？

「ちょっと、何言つて！ ……つそ……」

闇行は、暴れる黒兎の上に平然と乗り続けている陽に絶句した。  
通常数カ月、下手をすると一年以上かかることを、たつた1日で平気でやってのけたのだ。

驚いても無理はないだらう。

（……そつ、そつよ、黒兎つて子が手加減してるとだけよ！）

だが、闇行はそのような事態を認めるのを潔しとしなかつた。  
いくら家族の面々が認めた奴といえど、闇行の前にいるのは、ずつ

と蔑んできた男。

簡単には認めるわけにはいかつたのだ。

「いやひ、ひよひ、まつ、じへひ、止まつてえええーーー！」

(限度つてもんがあるだろー)

（つ心で思え、黒兎はゆつくつと身体を動かすのを止める。意志疎通つて、素晴らしい。）

（つかやつべえな、明日内腿絶対筋肉痛だな、じりや）

数分動いてもらつただけだが、既に脚は悲鳴を上げてしる。かなりの力を使つたのだろうと思い、明日の自分の体調を心配した。その中で、ふと思つた。

（やういえ、ちょっとした助言以外、何も教えもらつてないんだが）

しかしながら、これについては陽が悪い。

馬術に限らず、何に対しても教わる上で過程と段階がある訳だが。陽は知らずうちにそれら全てを通り越して、最終段階までクリアしてしまつたのだから。

それを知らぬ陽は、さうに闇行の神経を逆撫である。

「闇行せーん、教育放棄しないでくださいーーー」

「~~~~~！……ないわ」

「はい？」

「アンタに教えることなんて何もないわ！」

（え、帰つちまつんの！？）

心底憤慨した様子で帰つていく闇行に、何か怒らすようなことしたか、などと陽は考える。

（今更存在自体に、って言われても困るけどな）

そう思いつつ、陽は黒兎をゆっくりと走るよう指示する。人の感情の起伏にはたまに疎い陽なのであった。

場所は移つてある回廊。

Side 閻行

「なんなのよ、アイツー！」

なんだか無性にイライラする。

下手に出てきて、へりくだつた胸くそ悪い女々しい奴かと思つたら、たまに男の癖に意外な一面を見せてくる。

今回もそうだ。

馬をたつた1日にも満たない、あの短時間で乗りこなす？

……あり得ない。

そんなことあつてたまるか！

「どうかしたのか？」

「あ、母様……」

「うわ、ヤバ……！」

よつにもよつて母様と会うなんて……。  
匙投げたついでバレたら怒られるー

「またあやつと何かあつたか？」

「…………え？」

母様は、優しい言葉で問いかけてきた。  
……怒つて、ない？

「悩みがあるのじやない？ それも陽絡みの。……全部顔に書いてあるわ」

「うう……」

母様は凄い。

分かり易いのもあつたかもしれないナビ、表情でどんないとを考えているのか、大抵わかってしまう。

「一体、儂が何年お主の親じておるとゆづりおるのやア」

「はー。今年で十年目となつますー。」

ハツキリとボクは答える。

この十年は、ボクの誇りだから。

「もうそんなになるか……時が流れるのは早いのう」

「十年なんて、あつといつ間でした」

「ほんとうに代わり映えのない田舎だつたからの……と、やうではな  
い！」

話を拗らせるでない！

と言われた。

今、ボクのせい？

「まあ兎に角、話してみよ」

ボクはとつあえず、相談にのつてもううしと云した。  
気概なく話せる唯一に近い母様に、出来事も、思つたことも全て話  
した。

「ふむ。……羨ましかつたのじやな」

「なつ！ 違つ！ わないぞ」……

「その才に嫉妬してしまつた。……だから認めたくない。そういうじや  
う？」

「…………」

図星だつた。

そして迂闊だつた。

母様は聰明だから、ボクが心のどこかで考へていたことなどわかつてしまつ。

母様に話したのは間違いだつたかもしれない。ある意味間違つてなかつたかもしれないけど。

「まあ、非凡の身である[癖]に、あやつは堂々ともしないからの。さら[元]自分が非凡であるのをわかつてなことがなお性質が悪い」

母様もそつ評価するの……。

なんだかムカつく！

「これこれ、嫉妬心剥き出しにするでないわ。……お主はお主、奴は奴じや！」

少しむくれてこると、頭を撫でてくれた。

「お主は儂の大切な娘。そりじやろ？」

「はつ、はつー！」

(因みに)

薺は、そんな愛らしい一面を自分だけに見せる娘のことが、堪らなく可愛いと思つたりしている。  
結構な親バカぶりである

「つむ、よこ返事じやーー。やつしたら瑪瑙、お主は陽のといひく戻れ」

「えー」

「えー、ではない 儂と牡丹の頼み、聞けぬか?」

「つう、わかりましたよ～」

母様と……牡丹様、の頼みだから、不承不承ながらやる」とこする。  
せっかく親子水入らずだったのに、水をされた気分だわ。

陽は、自分の知らぬところで閻行の 些か理不尽である 怒り  
をかつっていた。

変わつて広場。

Side 陽

相も変わらず、黒兎を走らせてる。  
まだまだゆつくりとした速度だが、大分慣れてきたな。

「暇だなあ～」

何やりやあいいのかわからんから、ぶつけやけ暇。

「誰か暇潰し相手になってくれる奴はない……」

あ、ヤバ

「……………」

お約束通り蒲公英が表れた。  
こうじつた問いかけをすると、ビニから聞きつけたかわからんが、  
ほぼ確実にやつてくるんだよ。  
……凄くね？

「……………」

うん、現実逃避は止めよう。

……ヤバいって言つたのは違うんだ！  
ほら、あれだ、一応訓練中だから遊んではいけないと思つただけで  
あって。

そつ、そうだ、言葉のあやつて奴で……！  
決して悪意があつた訳じゃ

「どうかしたのお兄様？」

「いめんなさい」

すかさずの謝罪だ。

蒲公英は何が何だかわかっていない様子。

俺の罪悪感からの行動だから、わかつたら凄いんだけどさ。  
ふう、危なかつたぜ……。

「……つて、えええ！　お兄様、もう馬に乗れる様になつたのー？」

今頃気付く?  
つていうか。

「そんなに驚くことなのか?」

「う、うん」

マジか。

馬術、つてのは案外難しいもんなんだな。  
でも、半日で上手でできちまつたぞ?

俺が凄いのか?

うん、やるな、俺。

「セヒ、続きをやるわよー。」

自分褒めてたら、セヒよりも不機嫌一割増の闇行さんが帰ってきた。  
一度放棄したのに、平然と戻つてると、びつよ。

ま、反論は認めない空氣だから、黙つて従つことにするナド。

「う」みんな蒲公英、呼んでおいて。埋め合せは今度するからな

「うんー。」

さてと、やりますかねー。

「人のとき、自分で書いたのを後悔するとは思わなかつた」と

第十一話（前書き）

ちょっと遅れた。

## 第十一話

Side 陽

「ちょ、蒲公英、引っ張らないで！ 痛い！ マジ死ぬ！」

「お兄様が埋め合わせはする、って言つたんだよ～」

「うんっ！ 覚えてる！ だから、頼む、手放してくれ！」

「ええ～！ そんな」と言つた。「たんぽぽ傷ついたやつだな～」

「だったら、俺に合わせて歩いてくれよおお～...」

案の定の筋肉痛です、はい。

その所為で、ただでさえ歩くのもままならないのに、蒲公英さんは手を繋いだ左手を容赦なく引っ張ります。

拷問ですね、わかります。

「ぐおおおお……痛え……」

時折止まり、左手は蒲公英さんが放してくれないので、余っている右手で内腿をさする。

マジで黒兎に乗るのキツイ。

内腿で挟みつつ、踏ん張るとか尋常じゃない力がいる。だから、内腿と腹筋あたりが凄く痛い。

本当に、足腰をもつと鍛えようと思つたりした。

「大丈夫～？」

「まあ、なんとか、な」

蒲公英が顔を覗き込んでくる。  
他の部位は別に問題ないしな。

「なら良かつた！　じゃ、お兄様、早く早く～」

「そんなに焦る」となんてないだろ？」

「いいから、いいから」

何がいいのかさっぱりだ。  
まあいいか。

蒲公英がいいならそれで。

……これで兄貴分らしくなれてるか？

えー、ここで現状の説明だ。

只今俺と蒲公英は街へと繰り出す途中。  
前に約束した通り、埋め合わせをする為だ。

本当は、昨日に酷使し続けた筋肉が悲鳴をあげてたから、寝台の上  
から動きたくなかったんだがな。

しかしながら、蒲公英さんによつて手を引かれ強制連行され、今に  
至つてるのだ。

きやー、視姦されてるみたい、萎えるうー。

(信じたくないことに)有名で名声の高く、人気者である母さん、すなわち馬騰の姪であり、性格的なものも相まってか、蒲公英は人気がある。

そんな蒲公英の隣に男 しかも手を繋いでる つまり俺のことが気にならないはずがない。

俺は、そ、そんなに見られたら、感じちゃう、な性癖の持ち主じゃないんで、発情なんてしないが、むず痒くなつてくる。

無論、居心地が悪いという意味で、だ。

大体、こういった奇異の目で見られるのが一番嫌いなんだよ。だから、あんまり往来を歩くのは好きじゃなかつたりする。かといって、自分で約束した訳だし 蒲公英を無下には出来ない。

べつ、別に蒲公英の為なんかじゃないんだからねつ！

勘違いしないで、自分の言葉に責任を持つてるだけなんだから！

うん。

瑪瑙さんと真名交換したときの言い回しの真似、なんだが。

……男が言つたら、ただキモいだけだな。

もし金輪際、男でこんなようなことを言つよつた奴がいたら、問答無用で殴つてやるぜ。

おっと、話がずれた。

まあ、視線を受けながらも、人間臭いといふを半ば強制的に歩かされている。

もう両の指では数えられないほど連れ出されていたから、慣れてる

つもりなんだけどや。

「お兄様、」  
「ちーちーちー！」

「うん~？」

俺は、それはもう凄まじく振り回されまくっていた。  
服屋に入つては物色し、甘味処に入つては冷やかし、また違う服屋  
に入つては……と、蒲公英がはじこしまくった為だ。  
知り合いの人、特にご老体には、時たま声をかけたりもしていたの  
もある。

蒲公英は、お洒落したいお年頃でありますとも、基本いい子なのだ。

蒲公英可愛いよ蒲公英。

そんなこんなで、俺は黙つてついていっていた。

「ねえねえお兄様、似合つ？」

「…………」

黄緑色の髪留めで横髪をまとめている。（原作でつけてたやつ）  
おろした髪のままでも良かつたんだが……うん。  
なかなかどうして。

「これ買つた」

似合つてゐとは思つたけど、……そんな即決されたせいであつかけから  
んに表情変えた覚えはないんだがなあ。  
つか、意外と高い。

「蒲公英さんや。……ちよつといじりでまつててくださいな」

「ええ～…なんでも～！」

「わいわいのハマ団子のおかげで呪つません」

まあまあの味だったよ、つさ。

「わへ、しうがなーいなー」

「そんな露骨な反応すんなよな。……多分、すぐに帰つてくれるはず  
？」

「たんぽぽに聞かないでよ～」

母さんに前借りを要求してくる予定だ。  
でも、あの阿呆な母親の気分次第で交渉時間が激しく変わつてくる  
からなあ。

あの阿呆、マジで性格、つか性質が悪い。  
聞けば、面白を第一主義だということらしい。

俺を文官候補にしたの、7割が面白そだから、だつたそつだし。  
あの真面目は3割だけだったと聞いた時は、俺の拳は無意識に振り  
上げられてた。

それに気付いた薊さんに羽交い締めされ、

「無駄じや、……諦めい  
と諭されたけど。

ハア、……母さんに借り作るとか、気が遠くなるなあ。  
土下座のみで事足りればいいけどなあ……。

### Side 三人称

「遅い遅い遅ーーーい！」

蒲公英はほんの少し、ちょーーっとだけ怒っていた。  
かれこれ半刻は経っているのにも関わらず、陽が一向に帰ってくる  
気配がないからだ。

自分の伯母、すなわち牡丹が面白いこと好きなことを蒲公英は知つ  
ているが、それを考慮し差し引いていたとしても遅いと感じていた。

そこには……、

「よつ、爺さんよ……ただでさえクソ不味いラーメンに髪が入つて  
るたあ、どうこうつもりだ！」

「アニキの言づ通りだ！」

「そ、そなんだな。美味しかったけど、お金は払えないんだな」

「そ、そんな！」

……それはもう典型的な「ひつき」が表れた。

蒲公英がいる呉服店の向かい側の、老夫婦が営むラーメン屋でからその声は聞こえた。

蒲公英は、その老夫婦と気の知れた仲であるので、「ひつき」の自作自演であろうことを確信していた。

だからこそ、この街の長の姪としても、一個人としても、見逃す訳にはいかなかつた。

「おじさんたち、言い掛かりは良くないと想つな

「おじわつー？ ……何が言い掛けだつて？ これを見ろー！」

そこには、しつかりスープまで飲み干された空のビビンバの底に、黒髪があつた。

「（…………うわ、わかりやすっ） でも、これにすぐに気付かないほうがおかしいんじやない？」

「これでも退かないとは……言葉ではわからないみてえだな。体に教えこんでやろうか？」

「すぐに暴力で解決しようとする。……これだから脳筋は」

蒲公英は、やれやれと言わんばかりに肩を竦め、リーダー格の男を煽る

「お嬢ちゃん、いい度胸じやねえか。……表に出やがれッ！」

四人は大通りと呼べる、呉服屋とラーメン屋に挟まれた路地に出た。

（三人組を誘いだすことは出来た。後は、倒すだけ）

蒲公英はそれだけ考えていた。

その頃陽は猛然と駆けていた。

普段は眼帯で封じてある、黒目を開いて、だ。

実はその目、アフリカ人ばりの視力（5・0）を持っている。

右目だけでは見るに心許ない距離にあるものでも、左目では鮮明に見ることができる。

左目が封じてあるのは、そんな両目の圧倒的な視力の違いに、焦点を合わせるのに目の疲れが激しい等、いろいろ不便だという理由も含んでいた。

その曰く付きの左目によつて、かなり遠くから、今の蒲公英の置かれている状況を把握していた。

蒲公英なら多分、そんじょそこらの奴には負けないだろつと、陽は思つてゐる。

だが、陽にとつて、家族の誰かに手をあげること事態が許せないので。

戦ならそもそも言つてられない、と割り切つてはいるが。

「つ！ チュストオオオー！」

チビが蒲公英に特攻をかけていたのが見えた陽は、スピードを落とさず、蒲公英との距離にして約五歩の地点で踏み切る。ジャンプ一番で蒲公英を飛び越し、そのままチビの顔面にドロップキックをお見舞いした。

「チビ――――――！」

陽は無事に着地し、チビは吹っ飛んでいつてしまつた。

「蒲公英！」

陽はそれを一瞥し、すかさず振り返り左手を出す。蒲公英は疑問に抱きながらもその手をとつた。

「こべぞー！」

「わっ、わわっ！」

「てめつ、逃がすか！」

蒲公英の手を引き、駆け出す陽。  
いきなりのことに少し慌てるが、なんとか足を運ぶ蒲公英。  
それを阻止せんとするアーチキ。

「誰も逃げるとは、言つてねえが　　「ひぎやつ！　あ、」

突如陽は足を止め、背後から駆けてくるアーチキに、右脚の後ろ回し蹴りを放つ。

それはアーチキの虚を付けた……そこまでは良かつた。

しかし、いかんせん突然だつたので蒲公英は止まれず。

繋いでいた左手が前に引かれたことによつて、腰のひねりと左脚を軸とした遠心力が十一分ついた踵がアーニキの右側頭部に入つてしまつた。

陽はちょっとだけ罪悪感を覚えた。

Side 陽

「大丈夫ですかー？」

正直マジで痛そうだな……。

ハツキリ言つて、相当な威力だつたから、死んでもおかしくはない。いや、生きてますけどね。しぶとい。

あ、なんかむさいのきた。

「あ、アーニキの仇、なんだな」

「正当防衛だ。……つか勝手に殺してやるなよ」

「え？ 死んでない？」

「ああ。だから金置いて、そいつらもつておけとかいけて」

「わ、わかつたんだな」

「次はねえぞ」

金を置いてそそくさ（といつても、デブ体型かつ、のびてる一人引き摺つてるからかなり鈍重だが）逃げていった。

『「うおおおおおおーー』

『やるな、兄ちゃんーー。』

途端、賞賛の声があがる。

正直うるさい。

じつこづの嫌いだし。

「ありがとね、お兄様」

「「ありがと」」せえます」

「「うーん、蒲公英でも出来ることに横槍いれただけなので、感謝される筋合いないんですけどね」

むしろ、邪魔したかもしけんしな。

終わりよけりや 全て良しだが。

陽の、賊二人をいとも簡単にのした実力と謙虚ともとれる態度に、民衆からの評価もうなぎ登りに上がっていくのであった。

その後。

「お兄様」

つて、うねり。

腕を引かれたことによつて、中腰みたいになる。

忘れていた筋肉痛がツ！

おおう、パネッ！

そこに、頬に柔らかい感触とともに、聞き慣れない快音が耳に届く。  
蒲公英の頬が若干紅く染まつた顔が異様に近いんだがな。  
何だつたの？

「ホントにありがとね」

陽は語る。

「なんだかんだ、町に出るのが楽しみになつていつた瞬間だつたよ  
と

## 第十一話（前書き）

シリアルス？です。

てか、そろそろ主人公設定とかうらした方が良いのだろうか。

ある執務室から出でてくる一人。  
一方は呆れ、頃垂れていた。

S i d e 陽

「ねえ、山百合さん あの人馬鹿ですか？ 馬鹿ですよね？ 馬鹿  
だと言つてくださいっ！」

「……本当に馬鹿でしたら、漢から見ればこのような辺境の地、直  
ぐにでも落とされているでしょう」

「いや、そういうことじやなくてですね。……百騎で五百人相手に  
しろとか、おかしいでしょ！」

「……一人五人斬れば良い話です」

「だから、そういうことじやねえって！」

「……ならばなんだといふんです！」

「なんかキレられた！？ 敵よりも多く兵を揃えるという常識、完全  
無視つてのがおかしいでしうが！」

「……たかだか賊五百人」とき、百騎で十分と判断したのでしょうか

「いや、でも、もつと多く兵を用意して、一気に殲滅で良くないですか？」

「……必要ありません。機動力が落ちますし、それに、百騎中には私と貴方、陽君がいるのです……十分過ぎるでしょう」

「どんな働きを期待してゐるか知りませんが、俺、一般兵かつ初陣ですから！」

「……関係ありません」

「関係ねえの！？」

もつ僕ちやんびっくりですよ。  
君主が無茶苦茶だつたら、家臣も無茶苦茶とか、なくね？  
いや、まあ山百合さんは忠実に従つてゐただと思つが（むしろもう願いたい）。

それでも、振り回されるこつちの身にもなれつてんだ、コノヤロウ。  
いや、野郎じやないんだけど。

今から初陣ですよ？

一人とももつと劳れや。

完全な被害者たる俺が、ちゃんと政務に励んでいたと思えば、これだ。

「山百合、百騎連れて賊五百人の殲滅、宜しくう〜

「……はつ！ かしこまりました」

「あ、陽もついでにいってきなさい」

「……ええ〜」

「山百合、連行！」

「……はつ！」

「ちよつ ぐえ、ぐび、じつ、じまつでますつで

ついでってなんだよ。

そんなノリで死地に踏み込ませる馬鹿がビリニーカ。

そこにいるぞー！ だつて？

ははつ……殴つたろかボケエ！

### Side 三人称

元々、牡丹は早いところ陽を戦場に立たせようと画策していた。

戦場に立ち、どれ程の実力を發揮し、どのような戦功を立て。

そしてどうやって自分の隣まで登り詰めてくるのか。

楽しみで楽しみで仕方がなかつた。

そこへ、偶然にも転がりこんできた、願つてもみなかつた賊退治の依頼。

それも、五百人といつ、測るにはもつてこいな人数。だから、万が一の為に山五百石をつけつゝも、あえて兵を減らしたのである。

「ふふつ、楽しみね …… って、今日の陽の分どうするのかしら？」

自分の右前には、高々と積み上げられた山が三つ。

そして左前方の陽の机には、これまた高く積み上げられた山が一つ。いくら考えても、自分がやる、という結果しか見えてこなかつた。

「……たーすーけーてーあーざーみー（泣）」

執務室にこだます、悲鳴にも聞こえる声。

まるで、の〇太が猫型ロボットを呼ぶような声だ。されど、援軍が来ることはなかつた。

意外と近かつたな、おい。

Side 陽

「……鋒矢の陣を敷き、騎馬の勢いを持つて一気に蹂躪します」

と力強く、きびきびとした声で返事をする畠さん。

皆さん頑張れ

そんなことを考へてゐる。

「……先頭は馬白で」

馬白……馬白……あ、俺か。

(.....つて、はいいいい！？)

危ねえ、  
声出そりやつた。

……あの、こんな状況の経験者はいますか？

実際に「ハハ」状況に置かれたときに、て  
爆笑か　漫した笑いか

どれがいいんです?

ちよつ W W おまつ W W

みたいにすればいいの？

まあ、聞いたところどれもせず、ただ今の様に無表情を作り続け  
るけどな。

「質問でーす！ 何故僕が先頭なんですかー？」この部隊の隊長で

あり、強者である鳳徳様が先頭であるべきではないでしょうかー？」

わざわざ手を挙げて質問した。

流石に、ここでは真名で呼ばねえぞ。  
ただでさえ、今はいきなり先頭に抜擢されるとこいつことに不信感を抱かれているのだ。

そこに、上官である人の真名で呼ぶなんて無礼な真似、出来るかっ！  
つー話だよ。

そして、ここにいる皆が頷いた。

そらもうでしょーね、ふつー。

「……愚問ですね。答えなどわかつていいでしょう？」

いや、答えてやれよ…………。

皆さんはわかんねえだろ。

黒兎のせいだつてことをや。

何故つて、黒兎さん速すぎるんだもん。

「しかしー」

「……これは決定事項です。異論は認めません」

やりたくない俺は、反論を試みるが、山百合さんは有無を言わせてくれなかつた。  
ひどい。

これに対して一瞬じよめく顔さんだが、すぐに治まつた。  
隊長の　それも將軍中で一番の信のおける（らしい）　山百合  
さんの命令にこれ以上とやかく言つつもりはないから。

……つかさあ、再三言つてゐるけど俺、初陣なんだつて。

先頭とか死なせる氣？

まあ、死ぬのも一興だけど。

でも、生憎と死ねないんだ。

”死ぬな”

……もう五年ほどにもなる、昔に契つた古い古い約束。

俺からの約束は破られたのに、俺は何故か破りたくなかつた。  
ま、今は関係ねえわな

人を殺すコト。

それは意外にも簡単だつた。

一人目は袈裟斬りで、二人目は喉への突き、三人目は首を跳ね、四人目は、……と一桁殺したところからわざわざ殺し方や殺した数を数えるの止めた。

死んだ奴のことなど、気にしていられなかつたからな。

……いや、いちいち気にする必要なんてないんだが。

俺は黒兎の背の上で、ただただ槍を振るえば良いんだからな。

俺の思念を読み、黒兎は動き。

俺が思考しておらずとも、黒兎は動く。

人馬一体と言つべきなのか、黒兎に動かされている、と言つべきなのか。

とにかく今の俺は、俺たちは、負ける気など起きるはずがなかつた。

取り残しは、まあ、後ろに任せますよ。

### Side 三人称

先頭を走って 勿論すれ違う奴らは全て斬り伏せて いふと、  
陽は見たような奴らを見つけた。  
確認すれば、この前逃がした三人組であった。

なんとなく観察してみると、その中のアーチキが、この賊どもの頭らしいことがわかつた。

気が向いた陽は、逃げようとしていたところを捕まえたことにした。  
陽が、……再登場早すぎだるーが、と思つたのは余談である。

「つて訳で、そろそろ死ぬ？」

「いやいや、どうこう訳でだ！」

「セレニティブに聞いたらわかるだろ」

「どうこうとだ、デク！」

アーチキが振り返り、デクに問う。

間違えることなかれ。

デブではなく、デクである。

その間に陽は黒兎から降りた。

「なあ、兄ちゃん。……また、見逃してくんねえかな？」

デクから聞き、再び陽の方に身体を向ける。

陽が剣呑な目を向けて、腰に刺さつていて 今の状況だと槍より使い勝手が良い 剣を抜いて切つ先を向ければ、アーチキは慌てて取り繕う。

「勿論タダでとは言わねえ！ ……何が欲しい？ 金か？」

陽は無意識の内に、剣の握る手に力を籠めていた。

アーチキは如何に自分の身を守るかで精一杯なのか気付かない。

さらにはアーチキは言葉を紡ぐ。

……それが自らの首を絞める結果になつていては気が付かず！」

「そうだ！」要望とあらば女でもいいぜ？ 今いる上玉の奴は皆アンタに回してやるよ！」

「その金と女は、何処で仕入れた？」

「勿論、そこいらの四かられ」

「ふうん」

陽は右手に持つた剣を擧げる ゆうくつと、されど確實に。その行為は、剣を肩に担ぐ過程であるように見えなくもない。だが、後ろで見ていたチビとテクは気付いていた。

……明らかに殺める為の動作であると。

しかし、陽の一撃一動にあわせて、凍えるてしまつのではないか、と思えるほどに温度が下がっていくこと。 $\overline{\text{K}}$ 凍てつき、冷たい陽の右皿に、恐れ、声すらもだせなかつたのである。

「あー、アニ……」

ピタリと陽の擧げる剣が止まる。

これ以上は流石に不味いと思つたチビは、懸命に声を上げよつとした。

しかし、その瞬間、冷たい殺氣が向けられ、口を閉ざしてしまつた。そして、窺つようにな陽を見た途端、チビは固まつてしまわざにはいられなかつた。

射殺さんばかりの、酷く鋭く冷たい陽の右皿と皿があつてしまつては。

「あ……」

「なあ、だから、なあ頼むよ兄ちゃんー！」

チビは身震いが止まらず、押し黙つてしまつた。

よつてチビの声は聞かず、まだアニキは気付かない。

そればかりか、アニキはすぐるよつて陽の裾をひき、頭を下げて末だに懇願する。

「頭、上げな」

(へへひ、ひょろいもんだぜ)

そう思いながら、素早く頭を上げるアーチキ。  
しかし、現実は甘くなかった。

陽の右目が、それを雄弁に語っていた。

すぐにアーチキも動かなくなってしまった。

いや、本当は動けなかつた、が正しい。  
まるで、本当に凍らさせられたかのように、逃げなければ死ぬ、と  
頭でわかっているのに、身体が固まってしまっていたのである。

「俺、正直どっちにも興味ねえから。それに、アンタ前科たっぷり  
みてえだし、……死ねよ」

(嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ！)  
死にたくない死にたくない死にたくない死にたくない  
死にたくない！  
だずげで、があぢやーん！—（）

口を開くことさえ出来ないアーチキは、心の中で叫ぶ。

しかしその叫び、陽にとつては駄々漏れの言葉だつた。

陽にしてみれば、ここまで動搖しきつた人の心を見透かすことなど  
容易だつたのだ。

陽が目を鋭く細める。

それにより、一気に温度が下がる。

そして……、

「…………ちつちええな」

……陽は剣を振り降ろした。

陽は、頭かしらであつたアーキの首級を持ち、来た道を帰る。

その道は壮絶さうせつだった。

全て一太刀で斬り伏せられた死体が、通つた道を示すかのように並んでいたのである。

それを成した者。

それは、先頭をひたすら走つた者。

名を馬白、真名を陽といった。

この戦いは陽が、”西涼の天狼”として台頭するための前哨戦であるかのように、陽のために用意された独壇場だった。

「なんだか、……虚しいよな」

そう思わねえか、黒鬼。

道中そう声を洩らし、自分の馬に問いかける陽。

されど、今回ばかりは黒鬼の嘶く声しか聞こえなかつた。

そう。

だから、山百合が、帰ってきた陽に付着した返り血が、陽の涙のように見えたのは見間違いではなかつた。

陽は静かに語る。

「初めての戦で、相手は全滅。俺が殺したのは総勢33人。  
……意識して数えてた訳じやなかつたのに、未だに覚えてるよ」と

## 第十二話（前書き）

また、ちょっと遅れた。

## 第十二話

Side 陽

憎き太陽から光を受けた満月が、東の空から下界を明るく照らすかのように輝く、俺にとつて一番腹立しい夜。  
俺はいつもの城の上に来ていた。  
どうやって登ったかは割愛だ。

未だに、騒がしい声がここまで聞こえてくる。  
たつた百人にも満たない数でのひつそりとした勝利の宴だったはずなのに、この騒がしさはなんさ。

戦後の昂りを鎮める為に酒を飲むらしいが、むしろ酔いによつてもつと舞い上がるんじやね？

つて感じで、俺にはそのノリについていけないと云うか、合わないし、考えたいこともあつたんで、その宴会から抜けっこに来たつて訳。

俺と皆さんとの間にはかなりの温度差があつたからねえ……。  
正直、皆さんからすると盛り上がりに欠ける奴は邪魔だつただろうから、抜けたのさ。  
べつ、別に仲間外れにされた訳じやないからな！

「ぐへつー。」

……今は、瑪瑙さんの真似した自分への罰だ。

ま、一番の戦功者である（らしい）俺が抜けてもいいのか、つて聞

かれたら、すっげえ答えにいくんだけど。

そんなことはさておいて。

今日、初めて人を斬りました。

自らの手で、殺しました。

まだ斬つたばかりであるかのように、手にはその感覚が残っている。未だ戦場にいるかのように、血の臭いが鼻にこびりついている。だが、特に罪悪感に苛まれてはいない。

……その必要すらもな。

どちらかといえば、俺は悪人っぽい考え方だが、別に殺意に任せているから、って訳じやねえ。

誰かを傷つける、斬る、殺すといふことは、それと等しく自分が、傷つけられる、斬られる、殺される可能性がある。その因果応報を受け入れる覚悟を俺は持っている。さらには、殺せば何らかの益に、殺さなければ何らかの不利益を生むであろう奴らを殺しだけだ。

殺すコト＝罪。

俺の頭の中で、この等式は成り立っていないので、なんとも思われんだよ。

ただ、虚しいと思うが。

だから俺に、罪の意識はねえ。

かといって、俺自身がやったことが正義だと思つていい訳でもねえぞ。

人の見方によつて、捉え方が違つだらうけどよ。

大体、ガキの頃、散々いろんな人を 特に俺を利用してきた奴らを見殺しにしてきてるから、罪悪感なんて今更つてやつなんだよねえ。

あと、俺、基本大人嫌いだから、マダオ（まるでダメな大人）を消すことができるだけ、俺にはむしろ喜ばしい限りだ。

……この人間嫌い、戦時に湧き出た冷たい殺氣の根源となっているっぽい。

よくわからんが、なんとなくわかる。

言つてること矛盾してるけどな。

そういうのを改めて考えられた今だからこそ、本当に、蒲公英には驚かされる。

### Side 三人称

ときはさかのぼる」と、一刻前……。

太陽は沈みかけ、西の空は血に染まつたかのように、真っ赤に映えていた頃。

陽と山百合を含めた百騎は帰路についていた。

いや、厳密には $98 + 1 + 1$ と言つたほうがよいだろう。九十八騎が前を走り、その後ろに山百合、さらにその後ろを陽が追つているからだ。

行きは、先頭を山百合、九十九騎が後に続く形であり。  
戦闘直前に、陽と山百合の位置が代わっただけだった。

では、何故行きとは違うのか。

主に、といふか、徹頭徹尾陽の所為である。

陽は、戦が終わっても、アーネ（とつこでに一人）を斬ったときの冷たすぎる田と、漏れる殺氣を抑えられなかつた。  
陽のその田を見、全身に纏う冷氣にも近い殺氣を感じた山百合は、一瞬身震いし、怯んだ。

……歴戦の将である鳳令明でさえこの有り様だ。  
いくら自分が選抜した九十八騎でも、耐えられはしないだろう。  
そう判断した山百合により、隊と陽の間に自分が入る、といつ今の形に至るのだ。

未だビシビシと背に刺さる殺氣に冷や汗をかきながら、山百合は馬を走らせた。

程なくして、城に到着する。

兵のまとめ上げも完了し、戦後処理を皆に一先ず任せ、陽君を連れて玉座に参上しようか、と山百合が思つてゐる。

そのすぐ先に、珍しく出迎えがあつた。

牡丹、薔、瑪瑙に翠、そして蒲公英……家族皆が來ていた。

ほとんどは、陽を気にしているのだと分かつた山百合は、いちいち言及することはなかつた。

「……今しがた、参上奉るうかと愚考しておりました。しかしながら御足運ばせる結果となりし我が遅行、どうかお許しを……」

山百合は、片膝を着き、左の拳を右手で包み、頭を垂れる。

「別に問題無いわ。こっちが勝手に出向いただけだし。……しつかしかつたいわねえ~」

「今に始まつたことでは無からひに」

牡丹の呆れを含んだ言葉に対し、薊が答える。

「まつ、やうなんだけねえ。…………といひで山百合、…………陽、どうだつた?」

「…………言わはずとも、直にわかると思つます」

心配するようすで、かつ、好奇心を含んだ牡丹の問いかけに、頭を上げて山百合は答えた。

「「「ううこつ」と（へだ）?」」

「翠~、ボクに被せてくるなんていい度胸ね」

「はあ? お前が被せてきたんだり? あたしの真似して?」

「何でボクがアンタに被せなきゃなんないの? ばっかじやないの?」

「んだと……つー」

翠と瑪瑙が同時に尋ねる。

見事にハモつてしまつた仲の良い一人は、口喧嘩を始めてしまつ。

「聞く前に、呼べば早いのになあ……」

蒲公英は、そんな一人に呆れていた。

……妹分に呆れられる姉貴分つてどうなの、と思つたら負けである。

「……やんのか？」

「ボクに喧嘩を売るなんて、ホントにいい度胸ね！」

一人の口喧嘩が本格化し、どこからともなく武器を取り出し、打ち合いが勃発……

「　　つ！？」

……する」とはなかつた。

一人の本能が、無意識に殺氣に反応したからだ。

その冷たい殺氣が漂つてくるほつに構えれば、山百合がいた。

(山百合さんの殺氣はこんなに冷たくはなかつたはず)

(じゃあ誰だつてんだよ！)

(知るか！ ボクに聞くな！)

共通の敵と判断した一人は、意志疎通をとる。

二人の仲は、喧嘩が絶えることがない程最高に良いが、そのお陰か連携は、他の誰と組むよりはるかに屈強だった。

「……あれ、皆勢揃いでこんなとこで何してんだ？」

「「…………くつ?」」

山田岱の後ろから、震える声に素つ頓狂な声を上げる一人。

(まさかとは思ひたが……陽?)

(あつ、ああ、まさか、な)

(あれ? どうしたのかしら、翠? 震えてますよー? ……アビ  
つてんの?)

(バツ、そんなんじや……。くつ、人のこと言つ癖に、自分も震え  
てるぜ?)

(ボクは翠とは違つの。……やつ、これは武者震ことこのものなの  
よ)

(ははつ、さうか、そうか)

(……何よ)

(なんだよ、やんのか?)

一人は小声でも口論壁するところ、なんとも珍妙なことをやつての  
けでいた。

いや、むしろ軽口を叩きあつてこなこと、耐えられそうになかった  
のである。

陽が一步近づくと漂つてくる、心底まで凍えそうな冷たい殺氣  
だ。

「…………これほどとまね」

「「む、お半の全盛期を彷彿とれるやつだ」

「あら？ 私はまだ現役なのだけれど？」

「どの口が言づか。……一年程前から落ちて来ておるのや」

「まあ、……張り合いがなくなつたからね」

一瞬だけ寂しい顔をする牡丹。

「そんなことより、陽つけば、その全盛期とやらの私なんて確實に凌駕してくるわよ」

「だつたゞひあるのじや？ あれは流石に不味いぞ。」

薊は、その牡丹の一瞬の変化に気付くも、理由も知つてゐるのに、何も言わず流した。

そして、陽についての会話を進めた。

「分かつてゐるわ。そのためにわざわざ私の息子にしたのよ」

自分と似ている。

それは、陽の冷たさを読みきつての発言でもあつた。

「よ 「お兄様！」 ムカツ！」

「これ！ 姪っ子に怒りを露こするでないわー！」

陽、と言おうとした矢先、その言葉は違つ言葉に遮られてしまつ。それをしてしまったのは、蒲公英。

別に狙つた訳ではない。

偶然である。

台詞を被らされたことと、先駆けされたことに反応する大人気ない牡丹。

それにはかさずツツゴミを入れる薊。

今でこそ、阿吽の呼吸で漫才できる程の間柄だが、それぞれの娘翠と瑪瑙の関係と同じく、この二人も実は昔、仲が悪かつたりしたのは余談である。

「お兄様！」

もう一度声を上げ、陽を抱き締める 身長差がある為、抱き付くような形になつてゐるが。

「……無理、しないでね？」

「…………」

他の面々が、冷たい目に、殺氣に、たじろぐ中、蒲公英は臆すことなく見上げ、陽の目をきちんと見て訴えかける。

その行為に、陽は思わず声を失つてしまつた。

蒲公英の武は未だ完成されておらず、相手の心氣を感じることにまだ疎かつた為、出来た所業だった。

それを知るところではない陽は、今まで何人たりとも近づけなかつたのに、それをいとも簡単にやつてのけるとは、と素直に驚いていたのだ。

そして、陽は心のどこかで、大人びた一面を見せるものの、まだ子供である蒲公英を傷付けることを拒んだのだ。

不安げに揺りぐ蒲公英の瞳に映る自分を見て、

(……おっそろしい顔してんなあ、俺)

そう思い、苦笑することで纏っていた冷たい殺氣を霧散させることに成功させた。

それと同時に、はりつめた緊張感も消え、翠と瑪瑙は揃って腰をおとし、山田令也、まつと息を吐いた。

一方、牡丹と薊とはといふと。

「私つて、何なのかしら。……ぐすん」

「おお、お痛わしい限りじゃ」

よよよ、と言わんばかりに泣き崩れる義姉に、慰めの言葉を掛けるの義妹。

といった、かなりシユール光景を形成していた。

場所と時は戻つて、再び城の上……。

Side 陽

そつこえば、

「何故自ら武勇を奮い、戦い、そして殺すのか」

と、戦功が認められ、玉座に参上したときに”馬騰様”に聞かれた。

戦で人を初めて殺した兵には必ず聞く、といつ習わしであるらし。

奴らがやつてきた事をやり返してやりたいから。

一般的にそう考えれば、一番樂なのだろう。

しかし、正義面して、やることとは同じつてのは最高に笑える。殺しの理由付けとしては、馬鹿馬鹿しそぎるので見当違いだ。

次に、誰々のために、つてやつ。

これも、考えれば簡単なことだろう。

だが、求めらているつて訳でないのに、勝手に、何々の為に、だの、皆の為、とか、責任転嫁にも程があると俺は思つてる。

俺自身、重いの嫌いなんで、

「俺は戦う！何々の為に！」

みたいな殺し文句つていつのか？

これも不適当だ。

大体、戦うのに理由が必要か？

人を殺すコトに意味を見出だす必要があるのか？

……等々、いろいろ思つたが、建前上、

「馬騰様の歩む道を阻む者を排除したいが為にござります」と答えておいた。

”母さん”は、すっげえ胡散臭さそうな顔してたよ。

まあ、正直なところ、ひねくれた頭から弾き出された答えは、今のところ一つだけ。

「置かれている環境の改善」

そう、私的な場で”母さん”に本当のことを伝えた。  
そしたら母さんに、そんなところだと思った、などと言われた。  
心を読んでいましたよ発言します、もう何も言つまい。

陽は語る。

「俺と蒲公英は、孫策と周瑜の関係にある意味似るのかな? ...  
ただ、戦によつて引き起こされるモノは真逆だし、やることで冷めた感情が戻るつて訳じやないけどな」  
と

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2814z/>

真・恋姫†無双「外史の外史、ここにあるぞーっ！(改悪？版)」

2011年12月21日10時46分発行